

# 林遺跡・国府遺跡・土師の里遺跡

—一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



# 林遺跡・国府遺跡・土師の里遺跡

—一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

## はじめに

府道堺大和高田線と国道（旧）170号線の交差点改良工事に伴う発掘調査を実施しました。交差点は、近鉄南大阪線土師ノ里駅の西隣です。

発掘調査では、古市古墳群を構成する高塚山古墳（藤井寺市林遺跡内）、唐櫃山古墳（同市国府遺跡内）、そして国指定史跡である鍋塚古墳（同市土師の里遺跡内）に関する貴重な成果を得ることができました。

高塚山古墳では基底部の盛上構造、唐櫃山古墳では墳丘と周壕の構造、鍋塚古墳では古墳北辺の旧地形などを確認することができました。これらの発掘結果は、日本古代国家の形成に深くかかわる貴重な歴史遺産である古市古墳群の内容を解明する一助になるものと考えています。

現在、本府は堺市・羽曳野市・藤井寺市とともに、百舌鳥古墳群と古市古墳群の世界文化遺産への登録を目指しており、このたびの調査結果につきましても古墳群の価値を証明する貴重な資料となり得るものです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にご協力を頂きました地元の皆様ならびに関係機関に深く感謝いたします。今後とも、文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 富雄 昌秀

## 例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した藤井寺市沢田4丁目所在林遺跡、同市国府1丁目所在国府遺跡、同市沢田4丁目所在土師の里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ主査小山田宏一が担当し、平成18年6月13日から平成19年3月30日、平成19年4月10日から平成20年3月13日に実施した。遺物整理は調査管理グループ主査宮野淳一、同三宅正浩、副主査藤田道子を担当とし、平成20年度に実施した。
3. 本調査の調査番号は、平成18年度は06009、平成19年度は07004である。
4. 出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆、編集は小山田が実施した。
7. 発掘調査、遺物整理及び本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
8. 本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、952円である。

## 凡 例

1. 本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P. 値）、座標値は世界測地系平面直角座標（第VI系）である。方位は、転載した図を除き座標北を示す。
2. 遺物番号のうち、1～81は図版と共通する。82～103は図版のみに付した番号である。図版の遺物番号に付したaは表面、bは裏面である。

## 本文目次

第1章	調査の概要	1
第2章	18年度調査	3
	1 18-1～6区	3
	2 18-3区(高塚山古墳)	6
第3章	19年度調査	6
	1 19-1区(高塚山古墳)	6
	2 19-2区(唐櫃山古墳)	7
	3 19-3区(鍋塚古墳)	21
第4章	まとめ	22
	1 微地形と古墳の立地	22
	2 唐櫃山古墳周壕と近世の開発	25
	3 唐櫃山古墳と市野山古墳	26

## 挿図目次

第1図	調査地周辺の航空写真(北東から)	1
第2図	市野山古墳周辺の古墳(1/500)	2
第3図	調査区位置図(1/2000)	2
第4図	18-1～3区土層柱状図(垂直1/40)	3
第5図	18-2区墓01平面図(1/30)	4
第6図	18-2区墓01出土遺物(1/4)	4
第7図	18-2区墓01の埴輪(1/4)	5
第8図	台形状に残る高塚山古墳の墳丘(南東から)	6
第9図	19-1区北壁断面図/高塚山古墳基底部(1/80)	6
第10図	唐櫃山古墳の周壕跡(西から)	7
第11図	19-2区遺構平面図(1/200)	8
第12図	19-2区東半部北壁断面図(1/80)	8
第13図	19-2区唐櫃山古墳後円部断面図(1/40)	9
第14図	19-2区唐櫃山古墳平面図(1/100)	10
第15図	19-2区唐櫃山古墳周壕断面図(1/80)	10

第16図	蓋形埴輪飾り板の類例	13
第17図	19-2区唐櫃山古墳出土埴輪1 (1/4)	14
第18図	19-2区唐櫃山古墳出土埴輪2 (1/4)	15
第19図	19-2区唐櫃山古墳出土埴輪3 (1/4)	16
第20図	19-2区唐櫃山古墳出土埴輪4 (1/4)	17
第21図	19-2区唐櫃山古墳出土埴輪5 (1/4)	18
第22図	19-2区唐櫃山古墳出土埴輪6 (1/4)	19
第23図	19-2区唐櫃山古墳出土埴輪7 (1/4)	20
第24図	19-3区調査区位置図 (1/500)	21
第25図	19-3-1~5区断面図 (1/40)	21
第26図	微地形復元にかかわる測点位置図 (1/2000)	22
第27図	高塚山古墳・唐櫃山古墳・鍋塚古墳周辺の微地形 (垂直1/100、水平1/1000)	23
第28図	2001年調査唐櫃山古墳後円部周壕断面図 (1/20)	25
第29図	地籍図にみる鍋塚古墳・唐櫃山古墳	25
第30図	延宝5(1677)年の沢田村の土地利用	25
第31図	唐櫃山古墳の周壕 (1/100)	27
第32図	唐櫃山古墳と市野山古墳の位置関係	27

## 図 版 目 次

図版1	18年度調査区・19-1区 (高塚山古墳)
1	18-1区 (南から)
2	18-2区墓01 (北から)
3	18-2区墓01遺物出土状況 (北から)
4	19-1区・高塚山古墳基底部 (東から)
5	19-1区・高塚山古墳基底部盛土 (南から)
6	18-6区 (南から)
図版2	19-2区 (唐櫃山古墳)
1	土師ノ里駅と高塚山古墳後円部 (南東から)
2	店舗基礎撤去作業 (西から)
3	堺大和高田線敷設時の盛土 (西から)
図版3	19-2区 (唐櫃山古墳)
1	道路盛土・店舗基礎撤去面 (西から)
2	店舗基礎跡と古墳の周壕 (南西から)

- 3 近世の葺石（西から）
- 図版 4 19-2 区（唐櫃山古墳）
  - 1 唐櫃山古墳検出状況（西から）
  - 2 唐櫃山古墳後円部（南西から）
  - 3 唐櫃山古墳後円部（西から）
- 図版 5 19-2 区（唐櫃山古墳）
  - 1 近世の葺石と溝01（南から）
  - 2 北壁周壕断面（南から）
  - 3 周壕断面と溝01（南東から）
- 図版 6 19-2 区（唐櫃山古墳）
  - 1 堤状に削り残した地山（南西から）
  - 2 堤状に削り残した地山（南から）
  - 3 堤状に削り残した地山（北西から）
- 図版 7 19-2 区西半部
  - 1 19-2 区西半部（東から）
  - 2 方形微高地01（東から）
  - 3 溝02（南西から）
- 図版 8 19-3 区（鍋塚古墳）
  - 1 鍋塚古墳と 19-3-1・2 区（北東から）
  - 2 鍋塚古墳と 19-3-1・2 区（北西から）
  - 3 19-3-1 区（北東から）
  - 4 19-3-2 区（北東から）
  - 5 19-3-3 区（南西から）
  - 6 19-3-4 区（西から）
  - 7 鍋塚古墳西の小道 A（南西から）
  - 8 鍋塚古墳東の小道 B（北東から）
- 図版 9 18-2 区・19-2 区（唐櫃山古墳）出土遺物
- 図版 10 18-2 墓01埴輪 1
- 図版 11 18-2 墓01埴輪 2
- 図版 12 18-2 墓01埴輪 3
- 図版 13 18-2 塚01埴輪 4
- 図版 14 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 1
- 図版 15 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 2
- 図版 16 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 3

- 図版17 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 4  
図版18 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 5  
図版19 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 6  
図版20 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 7  
図版21 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 8  
図版22 唐櫃山古墳周壕出土埴輪 9  
図版23 唐櫃山古墳周壕出土埴輪10  
図版24 唐櫃山古墳周壕出土埴輪11  
図版25 唐櫃山古墳周壕出土埴輪12  
図版26 唐櫃山古墳周壕出土埴輪13  
図版27 唐櫃山古墳周壕出土埴輪14

## 第1章 調査の概要

平成18～19年度に、林遺跡、国府遺跡、土師の里遺跡で、一般国道（旧）170号線及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事にもなう調査を実施した。

土師の里交差点の南は近鉄南大阪線土師ノ里駅、北東は市野山古墳（允恭陵古墳）、南西は仲津山古墳（仲津媛陵古墳）である（第1・2図）。

平成18年度 下水管・水道管の移設箇所である。調査トレンチ18-1～5区（林遺跡、高塚山古墳）、18-6区（国府遺跡）を設定した（第3図）。

18-2区は、有黒斑の円筒埴輪片を数きつめた、6世紀末～7世紀初頭の埋葬施設を検出した。18-4・5区は、府道堺大和高田線の盛土下に、敷設時に墳丘が破壊された、高塚山古墳の基底部が残存していることを確認した。

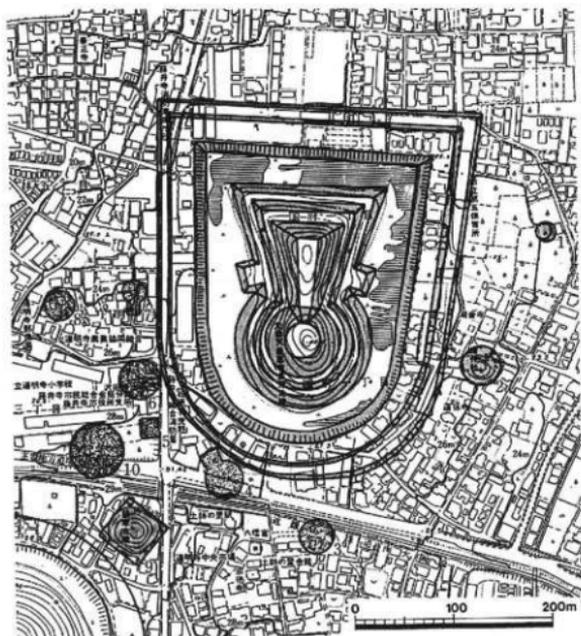
平成19年度 歩道設置箇所に、19-1区（林遺跡、高塚山古墳）・19-2区（国府遺跡、唐櫃山古墳）、（旧）170号線が近鉄南大阪線を跨ぐ跨線橋架替工事に関連して、鍋塚古墳の北辺に、19-3-1～4区を設定した。また電柱移設工事の際に、断面観察を実施した（19-3-5区）。

19-1区は18-4区と18-5区の間であり、前年度に引き続いて、高塚山古墳の基底部を調査した。19-2区は府道堺大和高田線の盛土下で、敷設時に破壊された唐櫃山古墳の後円部と周壕の一部を検出した。周壕は空壕であったが、17世紀には完全に埋まり、新開畑になっている。周壕の埋土から、多量の埴輪片が出土した。

19-3-1～4区は、地籍図に残る、鍋塚古墳の北半を囲む逆U字形の区画がテラス状の平坦面になることを確認した。19-3-5区は、古墳の基盤層である段丘層の上面高を確認した。

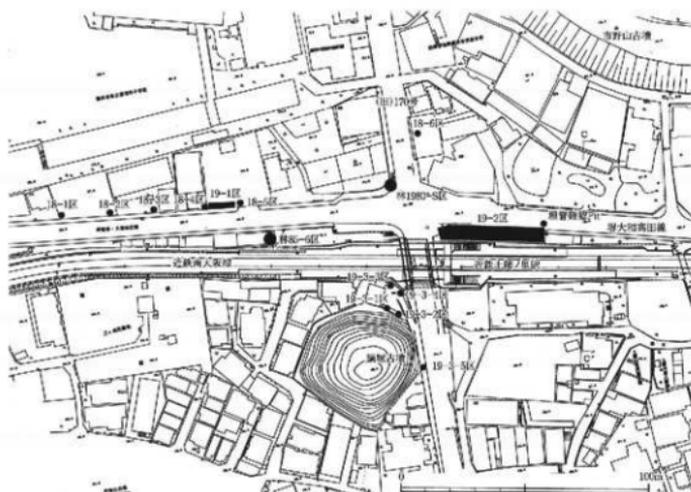


第1図 調査地周辺の航空写真（北東から）



- 1 衣縫塚古墳
- 2 宮の南塚古墳
- 3 御曹司塚古墳
- 4 唐櫃山古墳
- 5 小具足塚古墳
- 6 長持山古墳
- 7 赤子塚古墳
- 8 折山古墳
- 9 鍋塚古墳
- 10 高塚山古墳

第2図 市野山古墳周辺の古墳 (1/500)



第3図 調査区位置図 (1/2000)

## 第2章 18年度の調査

### 1 18-1区 (第4図・図版1)

現状は駐車場、下水管移設箇所である。道路にほぼ直交する1×5mの調査トレンチを設定した。駐車場の舗装を除去すると、近世～昭和の作土層(層厚20cm)があり、その下は直に段丘層(シルト・砂礫土)になる。作土層は段丘層をベースに形成され、段丘層のシルトがブロック状に混じる(第4図)。作土層から少量の染付と埴輪片が出土した。

府文化財調査事務所年報11で、地山上で年代、性格が不明な溝、柱穴、土坑を検出したと報告した<sup>①</sup>。しかし再検討した結果、上層作土の耕作痕であると判断するにいたった。訂正する。

### 2 18-2区 (第4～6図、図版1、9～13)

現状は駐車場跡地。下水管の移設箇所である。道路にほぼ直交する1×3mの調査トレンチを設定したが、トレンチ東壁で埴輪片列を検出し、東へ1mほど拡張した。

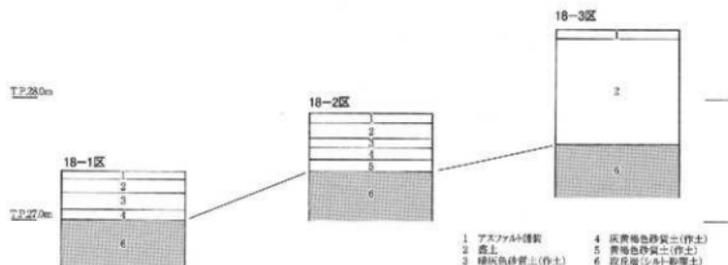
基本層序は18-1区に同じ。上から旧駐車場の舗装、近世～昭和の作土層、段丘層の黄褐色砂礫土である(第4図)。作土を除去した段丘面で土坑01、土坑02、墓01を検出した。土坑01・02は作土が埋まる耕作関連の土坑である。

**墓01** 円筒埴輪片を敷きつめた埋葬施設である(第5図、図版1-2、3)。北端は土坑02によって破壊され、上半部は上層作土の形成時に、攪拌によって消失したと考えられる。

全長は2.50m前後、幅は70cm以上。段丘層を掘りくぼめて敷いた粘性土の上に、埴輪片を1～2段ほど重ね床をつくる。南の小口は埴輪片を立てる。

墓の築造年代は、副葬された須恵器の型式から、6世紀末から7世紀初頭である。

1) 須恵器 頭部付近に須恵器脚付長頸壺と須恵器高環が副葬されていた。脚付長頸壺は残存高約17cm、脚部を打ち欠く。体部下端に、脚部の方形透かし穴(3方)が残る(第6図1、図版



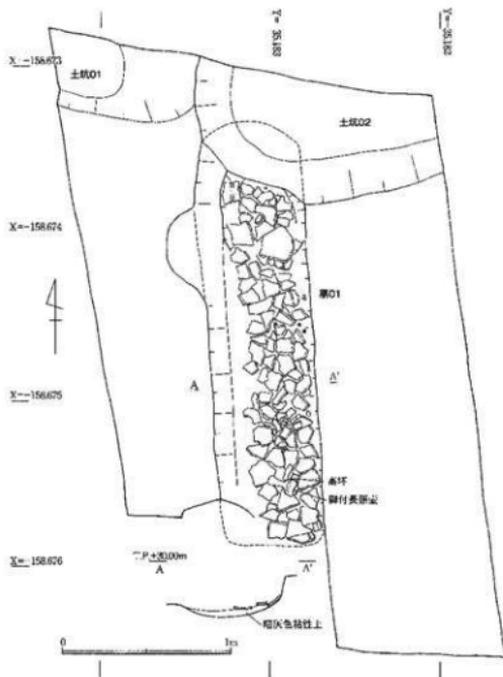
第4図 18-1～3区 土層柱状図(垂直1/40)

9-1)。高坏は完形で、器高約8cmの小型品である（第6図2、図版9-2）。ともに、中村浩陶  
 邑編年Ⅱ型式5段階、田辺昭三陶邑編年TK209式併行である。

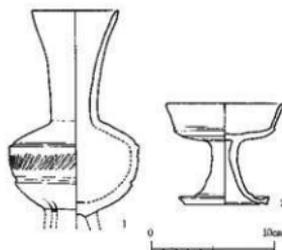
2) 埴輪 有黒斑の普通円筒埴輪が6個以上、使われていた。埴輪a（図版10-97）、埴輪b  
 （図版11-98）埴輪c（図版11-99）、埴輪d（図版12-100）、埴輪e（図版12-101）、埴輪f（図  
 版13-102）、埴輪g（図版12-103）である。

復元径が40cm前後の大型埴輪の破片である。突帯間の芯々距離は、12～12.50cmに収まる。総  
 じて突帯は高く、胎上は長石が目立つ。ハケメの原体は細かく、8～10条/cm。口縁部は、す  
 べて外側に肥厚するタイプで、バリエーションがある（図版10）。

埴輪aは高さ66.50cm以上、口縁部の復元径36cm。透かし穴は下から2・3・4段目にあり、横  
 長の楕円形である。埴輪bは高さ35cm以上、口縁部の復元径42cm。埴輪cは高さ34.50cm以上、



第5図 18-2区 墓01平面図(1/30)



第6図 18-2区 墓01出土遺物(1/4)

下から2段目の復元径36~38cm。埴輪dは高さ28.00cm以上、下か2段目の復元径38cm。埴輪eは中央の段で復元径39cm、高さ33.50cm以上。埴輪fは高さ28.50cm以上、下から2段目の復元径40.00cm。埴輪gは高さ33.50cm以上、口縁部の復元径は38cm。

突帯間外面の2次調整は、B b種ヨコハケ(埴輪a~f)とナデ調整(埴輪g)がある。内面は、ナデ調整。埴輪a(第7図6)は、静止痕の間隔が4cmである。

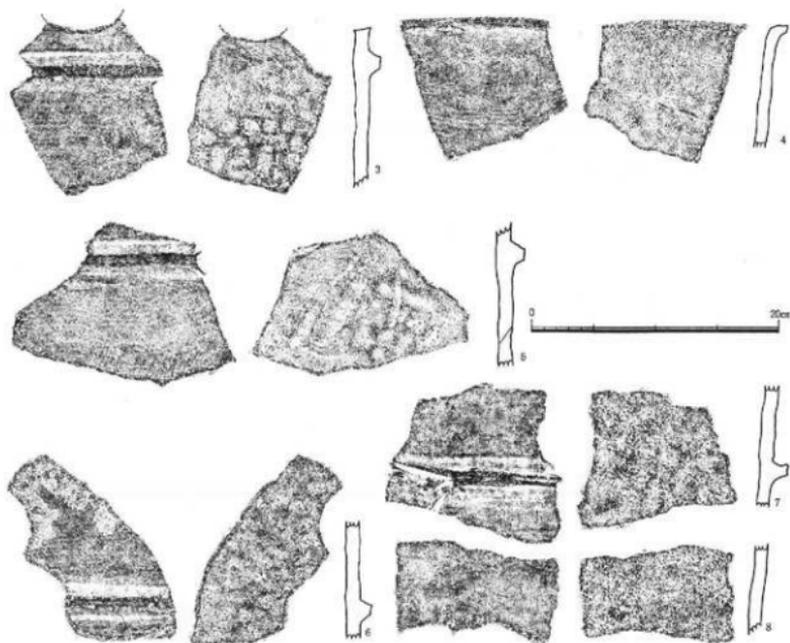
底部の破片が見当たらず、地上に露出する部分を打ち欠き転用した埴輪片である。外面調整や突帯の特徴から、第1候補は南の仲津山古墳の埴輪である。

### 3 18-3区

18-3区は下水管移設箇所である。1×2mの調査トレンチを設定した。盛土を除去すると、段丘面となる。遺構・遺物は未検出。

### 4 18-4・5区

18-4区は下水管移設箇所である。1×2mの調査トレンチを設定した。18-5区は水道管移



第7図 18-2区 墓01の埴輪(1/4)

設箇所で、1×2mの調査トレンチを設定した。高塚山古墳の基底部の盛土を確認した。遺物は未検出。

### 5 18-6区 (図版1-6)

下水管移設箇所である。1×3mの調査トレンチを設定した。一般国道(旧)170号線の盛土が厚く、地表下2mまで掘削したが、段丘層を確認することはできなかった。

## 第3章 19年度の調査

### 1 19-1区 (第8・9図、図版1-4)

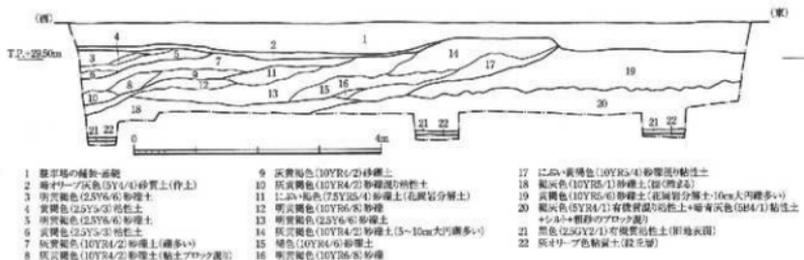
歩道の重力式擁壁の工事箇所である。2×11mの調査トレンチを設置した。現状は駐車場である。西は18-4区、東は18-5区に接する。高塚山古墳の基底部盛土を確認した。

高塚山古墳は、昭和30~32年頃、府道堺大和高田線の敷設によって破壊された5世紀前半の円墳である。直径約50m。これより前、大正9(1920)年に起工した、天王寺一道明寺間(現近鉄南大阪線)の敷設時にも、墳丘の南端が切断されている。土師ノ里駅下りホームの崖に、墳丘の断面が台形状に残っている(第8図)。



第8図 台形状に残る高塚山古墳の墳丘(南東から)

高塚山古墳の盛土 トレンチ東端は、高塚山古墳のほぼ中心である。駐車場の舗装を除去すると昭和の作土層があり、その下から削平を免れた基底部の盛土(層厚1.40m)が現れた。盛土は付近の段丘礫層に由来する砂礫土で、段丘層(粘性土)の旧地表面から積み始めている。トレンチ調査なので円錐台か四角錐台なのか形状は不明だが、まず中央に土壇を築き、次に外に向けて盛土を進める方式である(第9図)。



第9図 19-1区 北壁断面図/高塚山古墳基底部(1/80)

盛土材は、段丘層に由来する砂礫土である。

なお、藤井寺市教育委員会が2006年に実施した、18-3区と18-4区の間地点の調査(TTK06-2)で、古墳の周壕が初めて確認されている<sup>10)</sup>。

## 2 19-2区 (第10~23図、図版2~7、9~27)

歩道設置と交差点拡幅工事箇所である。府道堺大和高田線と近鉄土師ノ里駅の間、約43×6.50mの調査区を設定した。唐櫃山古墳の周壕と後円部の盛土が遺存することを確認した。

唐櫃山古墳は、近鉄南大阪線ならびに府道堺大和高田線の敷設時に、後円部の大半が破壊された5世紀後半の前方後円墳である。事前の墳丘測量によれば、全長約53m、後円部の直径38m、周囲の平地からの高さ8m余りであった<sup>10)</sup>。土師ノ里駅下りホームの北壁には、鉄道敷設時に切断された後円部の断面が残る(図版2-1)。

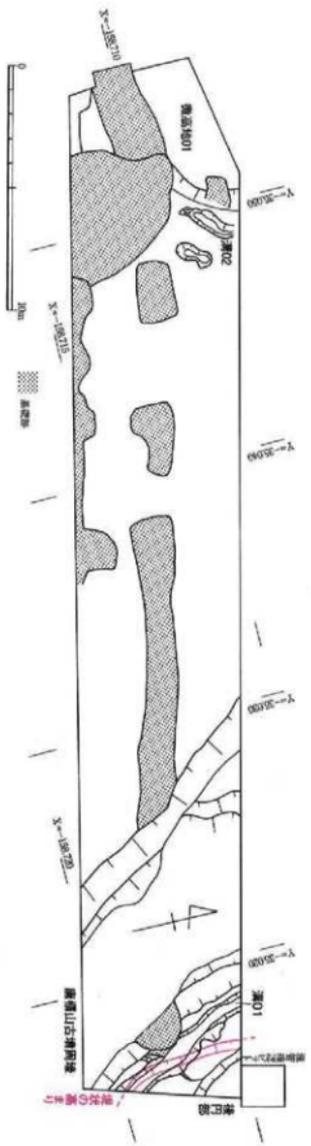
調査は、府道沿いに並んでいた店舗の基礎を撤去することから始めた(図版2-2)。基礎を撤去すると、調査区北壁に府道堺大和高田線敷設時の盛土が現れた(図版2-3)。盛土の厚さは交差点付近で3mほどあり、調査は木矢板を打設して進めた。

上層から、府道の舗装、府道敷設時の盛土(I層)、昭和の作土(II層)、近世の修築盛土(III層)、周壕内堆積(IV層)、後円部盛土(V層)、地山の段丘層(VI層)となる(第12図)。調査区の段丘層は円礫が多量に混じる砂礫土で、調査区西端の方形微高地01でT.P.28.50m、東端の後円部盛土下でT.P.27.90mを測り、東に向かって緩やかに傾斜する。

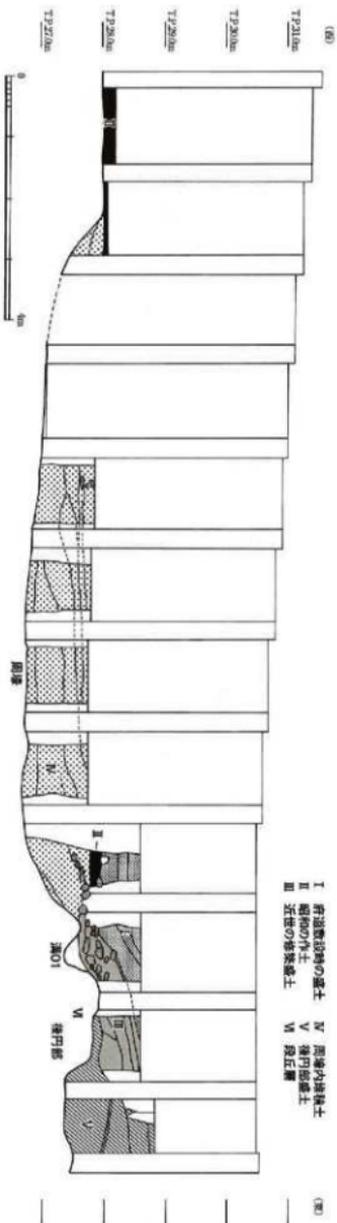
近世の唐櫃山古墳 I・II層を除去すると、調査区東端から河原石を葺く高まりが現れた(第



第10図 唐櫃山古墳の周壕跡(西から)



第11図 19-2区 遺構平面図(1/200)



I 竹道敷段神の盛土  
 II 埋物の付土  
 III 近世の赤気盛土  
 IV 周溝内埋積土  
 V 溝行跡盛土  
 VI 残瓦層

第12図 19-2区 東半部北壁断面図(1/80)

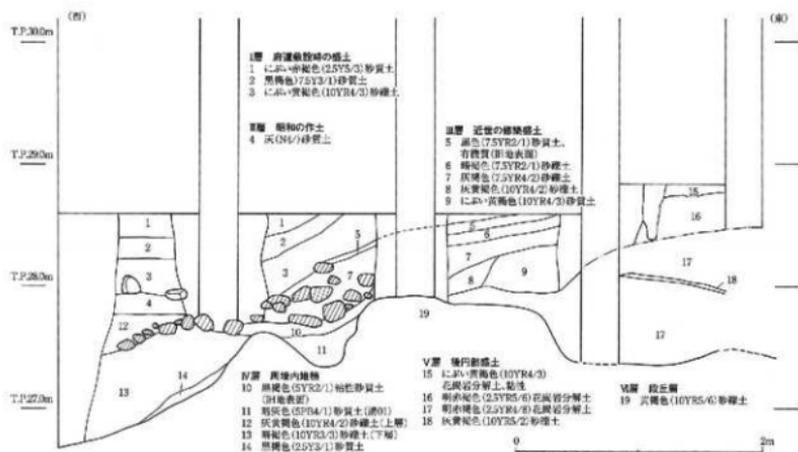
10図)。当初、後円部墳丘ではないか考えたが、下層から近世の溝01が見つかり、近世の盛土(Ⅲ層)であることを確認した。盛土する前の墳丘は、周壕を埋め立てる採土が進み、かなり破損していたに違いなく、近世の盛土は墳丘の修築が目的であったと推定する。

墳丘修築後、周壕は完全に埋没し、新開畑になった。上層の作土層から、暗渠01を検出した。暗渠01には石臼(図版9-90)が転用されていた。溝01からは、染付の細片が出土した。

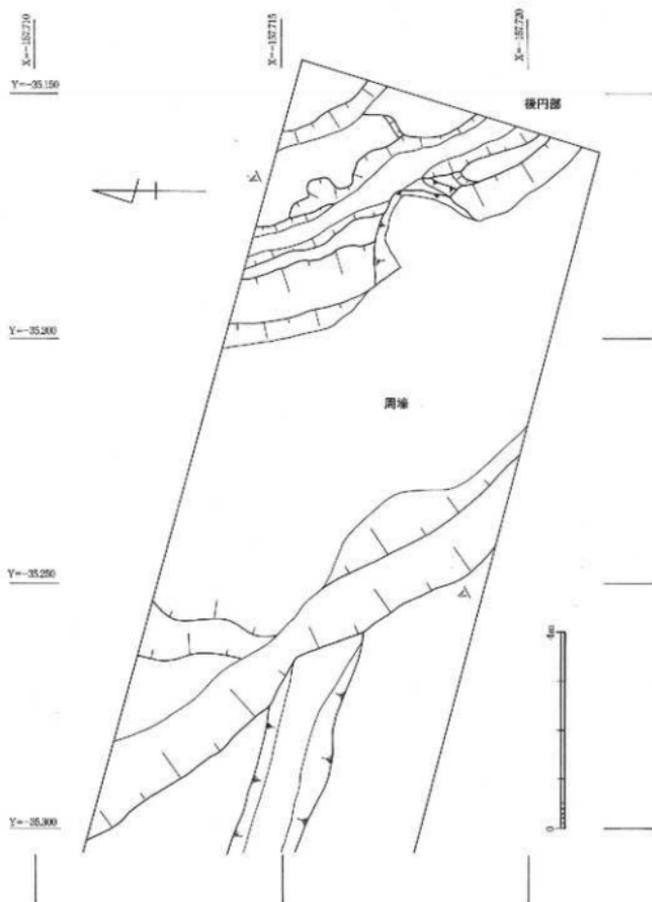
周壕 墳丘側の肩から周壕外側の肩まで幅7.30m、周壕外側の肩から深さ1.30m。周壕は意図的に埋め立てられていた。堆積土は近世の葎石を境に、上下2層に分かれる(第13・15図)。墳丘側の埋め土は(第15図7・8層)、墳丘斜面を崩した砂礫土で、葎石や埴輪片を多量に含む。外側の埋め土は(第15図9層)、段丘礫層から採土した円礫混じりの花崗岩分解土で、埴輪片は出土していない。

壕底は有機質のたまりがなく、埋没が始まる中世末までは空壕であった。本府が2001年に調査した後円部東側の周壕についても、同様な空壕であったと報告されている<sup>(4)</sup>。ただし開削後、1000年間以上が経過していたにもかかわらず、墳丘の崩落土、水成や風成の堆積物などが見当たらず、不自然な点が残ることは否めない。

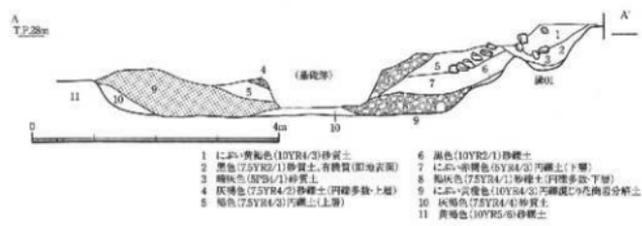
周壕の遺物と埋没年代(図版9)。暗渠01の堀形から17世紀第4四半期~18世紀第2四半期の波佐見窯系染付小丸皿(87)が出土した<sup>(5)</sup>。周壕の埋め立てが完了し、跡地が畑地になった年代である。これとは別に、14世紀の常滑窯系大甕(85)、16世紀第4四半期~17世紀第1四半期前半の瀬戸美濃窯系皿(88)があり、周壕埋没の開始年代にかかわる資料である。作土付近からは、



第13図 19-2区 唐櫃山古墳後円部断面図(1/40)



第14图 19-2区 唐槽山古墳平面図(1/100)



- |                             |                           |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 灰色(5YR4/3)砂質土             | 6 褐色(10YR2/1)砂礫土          |
| 2 黑色(7.5YR2/1)砂質土、有機質(即地表面) | 7 灰色(5YR4/2)汚礫土(下層)       |
| 3 褐色(5YR4/1)砂質土             | 8 褐色(7.5YR4/1)砂礫土(内層多数下層) |
| 4 灰褐色(7.5YR4/2)砂礫土(内層多数、上層) | 9 灰色(10YR4/3)汚礫土(内層多数)    |
| 5 褐色(7.5YR4/2)汚礫土(上層)       | 10 褐色(7.5YR4/1)砂質土        |
|                             | 11 黄褐色(10YR5/6)砂礫土        |

第15图 19-2区 唐槽山古墳周壕断面図(1/80)

18世紀第3四半期の波佐見窯系碗(89)が出土した。畑地の経営期間を示す資料である。

2001年の調査では、周壕が埋まり始めたのは、下層から出土した瓦質土釜から15世紀、完全に埋没したのは、上層からまとまって出土した陶磁器によって17世紀後半に特定されている。今回の遺物の年代は、この成果と矛盾するものではない。周壕が埋まり始める年代は、15世紀という2001年調査の年代観に従うこととする。

陶磁器のほか、多量の埴輪(後述)と少量の須恵器が出土した。須恵器環蓋(83・84)は第2型式5段階、TK209式併行。須恵器板状製品(86)は、平行叩き目紋と同心円紋がある。厚さ1cm、用途は碑であろう。また扁平な安山岩の河原石が出土した(91)。写真右端は、長22cm。後円部墳頂にあった竪穴石櫛の石材であろう。

これらの須恵器は、唐櫃山古墳の築造年代から遊離する。後述する耳環(82)もそうだが、周壕の外側に、6・7世紀の墓が存在していたことを予測させる資料である。

方形微高地01 調査区西端に、段丘砂礫層が周辺より30cmほど高い方形微高地01がある。微高地の西には、現存長2.50m、幅0.70m、深さ0.25mの溝02がある。埋土は灰褐色粘性土で、円礫が混じる。遺物は出土せず、年代の決め手を欠く。

なお、方形微高地01が、地籍図(第29図)の「唐櫃塚」(唐櫃山古墳)、「高塚山」(高塚山古墳)、「鍋塚」(鍋塚古墳)に挟まれた、字「高塚」付近にあたることを付記しておく。

唐櫃山古墳の後円部 調査区北東端に接する埋管確認ピット(第11図)の断面調査から、府道盛土下約70cm(T.P.29.38m)に、破壊を免れた墳丘が残存していることを確認した。

墳丘は、段丘面を堤状に掘り残した内側から盛土が始まる。堤状の高まりは、北壁で幅約2.50m、現存高0.50m、東壁で幅約1.50m、現存高0.50mである。

本府による、後円部を東西に横断する2001年の調査で、地山を削り出した堤状の高まりは確認されていない。今回調査した南西部に限られた工法であろうか。盛土の最下層は段丘礫層に由来する砂礫土(第13図17層)で固く締まるが、次に積む砂質土(第13図9層)は締まっていない。

盛土から、遺物は出土していない。第13図17層上面から耳環(82)が出土した。古墳盛土内の遺物ではなく、上層の近世盛土に含まれていた遺物である。

埴輪 周壕内からコンテナ10箱ほどの埴輪片が出土した。墳丘に近い埋め土から葺石と混じりまとまって出土したので、墳丘に樹立していた埴輪が大半を占めていると考えてよい。普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある(第17～23図、図版14～27)。窯荒焼成の土師質と須恵質がある。色調は橙色系、胎土は長石粒が目立つ。南250mの土師の里窯の製品であろう。

1) 普通円筒埴輪の口縁部 須恵質(9～15)と土師質(16～20、25)がある。須恵質は直立気味で、端部上面が平坦である。土師質の端部は、外側に肥厚するものが多い。9は線刻がある。12は復元口径36cm、端部外面に1条の沈線がめぐる。

9～12の外面は、静止痕が残るヨコハケである。25は口縁部復元径35cm、突出度の低い台形の突帯がつく。口縁部外面は断続的なヨコハケ。突帯間は、静止痕がわずかに傾くB種ヨコハケ。

突帯間の芯々距離は10.5cm。

2) 体部 11、21~24、26~46である。30、36、37は土師質。30は赤色酸化土粒が目立つ。他は須恵質。22と23は同一個体である。45は線刻がある。

中型から大型埴輪の破片がある。突帯間の芯々距離は、大型でも11cmを超えることはない。21は突帯間で復元径28cm前後、突帯間芯々距離9.50cm。23は復元径30~32cm、突帯間芯々距離8.50cm。24は口縁部まで残る資料で、突帯間の復元径28cm前後、突帯間の芯々距離9.50cm。37は突帯間の復元径40cm、突帯間の芯々距離10.50cm。

突帯間外面の2次調整はB c種ヨコハケ、B d種ヨコハケであるが、静止痕が突帯に対してほぼ垂直になるB c種ヨコハケ(33、37)と静止痕が30~40度ほど大きく傾くB d種ヨコハケ(22、23、44)は少ない。B種ヨコハケの大多数は、静止痕が向かって右に10~20度ほど傾くB c種ヨコハケである(1、24、25、29、31、32、35、36、38、39、40、41、42、43、45、46、54)。32は、静止痕がありB種である。

静止痕が斜めになるB種ヨコハケの分類は、静止痕の角度より、ハケ原体の幅と突帯間の高さの比較が有効である。ハケ原体の幅と突帯間の高さがほぼ一致するのはB c種ヨコハケ、ハケ原体幅が突帯間高よりきらかに長くなるのはB d種ヨコハケ、と分類する方がよい。

21は、三段にわたり外面調整が観察できる資料である。下から1段目の静止痕はほぼ垂直、2段目は13度、3段目は24度になる。仮に、別個体として扱われた場合を想定してみよう。1・2段目はB c種ヨコハケに分類して問題の生じる破片ではないが、静止痕の傾きが24度を越える3段目は、B d種ヨコハケに分類される場合もありうる。

しかし21は、静止痕の長さと同突帯間の高さが同じ規格(7cm前後)なので、静止痕の傾きが20度を越える3段目についても、B c種ヨコハケになる。2段目のハケを斜めに当てた結果、3条目突帯の裾はハケ原体によって、緩やかな弧状を描くように削り取られている。

このようなB c種ヨコハケが、唐櫃山古墳の周壕から出土した円筒埴輪の特徴である。

そのほか26は、1次調整のタテハケの上に、突帯整形時の板状工具端部の圧痕が残り、押し技法が確認できる埴輪である。

透かし穴は円形が多い。37は突帯間を大きく横長の楕円形に剥り抜く。突帯高は、総じて0.5~1cmに取まる。断面はM字形と台形が多い。

3) 朝顔形埴輪 土師質(47~49、51)と須恵質(50、52、53)がある。土師質49、51の胎土は赤色酸化土粒が目立つ。50は、体部肩に弧状をなす2条の線刻がある。

土師質と須恵質は、複合口縁部の突帯の成形方法が異なる。土師質47、49、51は疑口縁を突帯に利用する。一方、須恵質52・53は貼付突帯である。須恵質、土師質とも複合口縁部1段目のハケメ調整後に粘土紐を積み始めている(47、51、52、53)。

47は突帯上で復元径39cm、48は頸部突帯上で復元径36cm、49は頸部突帯上で復元径28cm、52は口縁部突帯上で復元径36cm、53は口縁部で復元径42cmである。

4) 底部 土師質 (55~61, 65~67) と須恵質 (54, 62~64, 68~70) がある。全周する資料はない。55と56は同一個体である。復元径は、54が24cm、57が36cm、58が33cm、61が40cm、64が32cm、66が32cm、70が40cmとなり、中型から大型がそろそろ。底部高は、54が8.50cm、57が10cm、58が10cm、62が8.50cm、67が9cmであり、8~10cmに収まるようである。

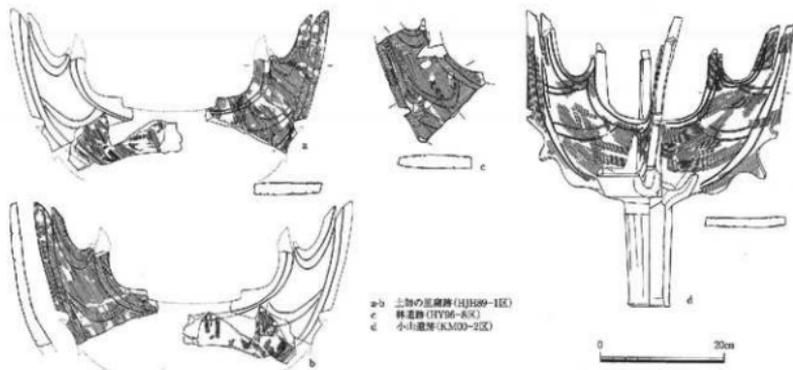
外面調整には、B種ヨコハケ (60, 61, 67)、2次調整を省略する1次タテハケ (55, 56, 58, 59, 63, 68)、タテナデ調整 (62, 64, 69, 70) がある。

底部端面の調整は、2種類ある。54, 57, 58, 60, 63, 65, 67は自重により、端部が歪む。底面は、粘土帯の接合痕 (58)、作業台に敷いた禾本科植物・蔓あるいは小枝の圧痕 (54, 64)、棒状圧痕 (57, 60, 65, 67) などの痕跡がある。一方、56, 62, 66, 69, 70は、強いヨコナデを加えて底面を整える。66は木目痕、70はハケメ調整が底面に残る (図版24)。

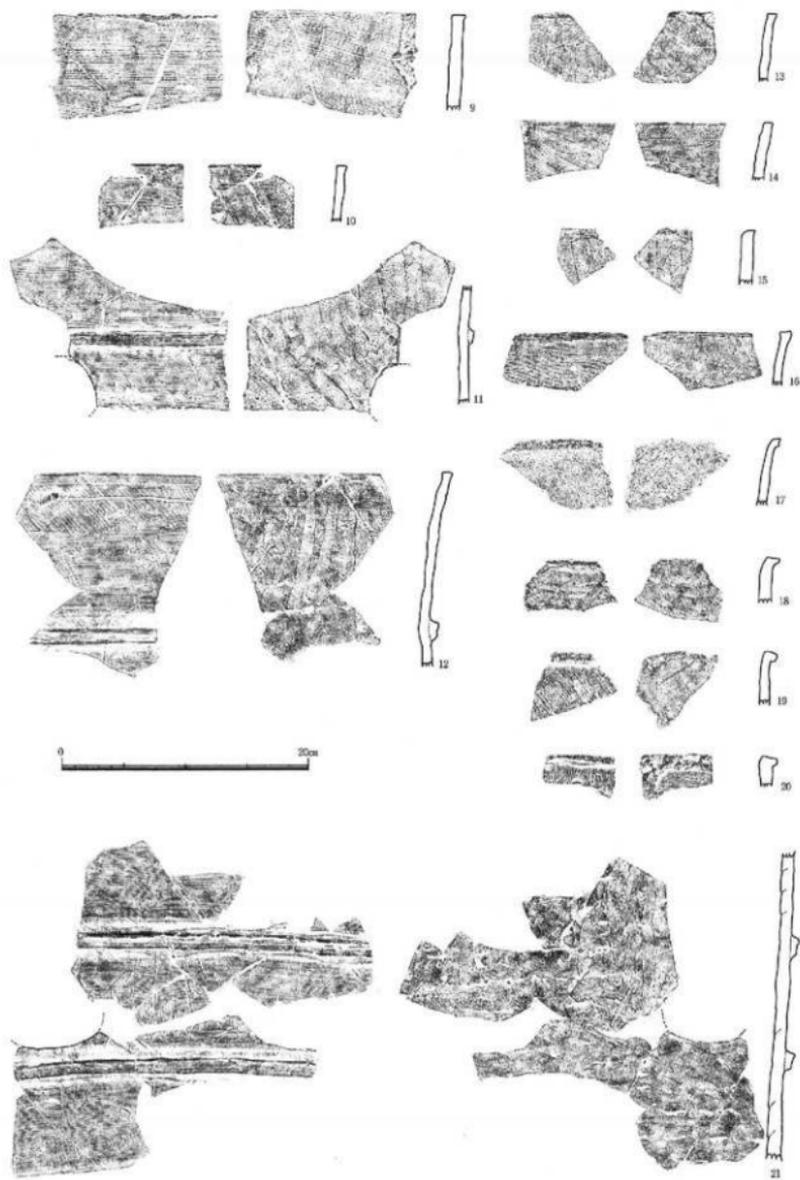
5) 形象埴輪 すべて土師質である。80は器壁が厚く、家形埴輪の裾周りに類似した端面がある。上面は壁体の剥離痕があり、裏面は半円形の粘土梁で補強する。家形埴輪以外とする検討の余地がある。104, 105 (図版27)は、80と同一個体である。81 (図版27)は蓋形埴輪の受部の軸にもみえるが、胎土・焼成が異なる。動物埴輪の脚であろうか。78・79 (図版27)は盾形埴輪であろうか。

6) 蓋形埴輪 2001年の調査に続いて、蓋形埴輪 (71~77) が出土した。色調は橙色系、胎土は長石粒が目立ち、土師の里窯の製品であろう。飾り板はやや粗いハケを施し、紋様を刻む。飾り板76と77は同一個体であるが、飾り板の輪郭に沿う2条一組の沈線間に充填す円弧紋の深さに違いがあり、71とは別個体とした。飾り板 (76) は、板外側の下端に、上鏝と下鏝に分ける切れ込みが確認できる。深さと形状は不明。

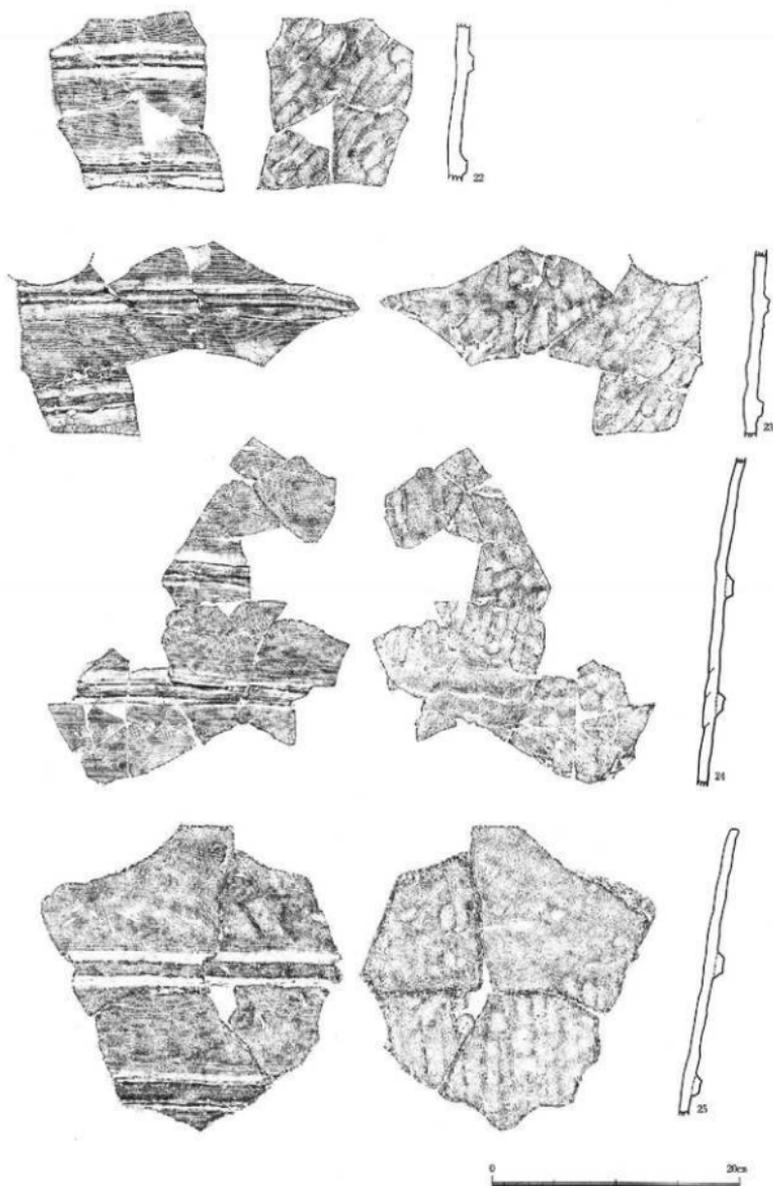
飾り板の頂部が3点ある (72~74)。73・74は、胎土・焼成が飾り板 (76・77) に近い。75は笠部の先端で、幅3.50cmの低い突帯がつく。突帯に沿って装飾的なヨコハケを施す。また向かって右端に、かろうじて1条の放射状沈線が残る。



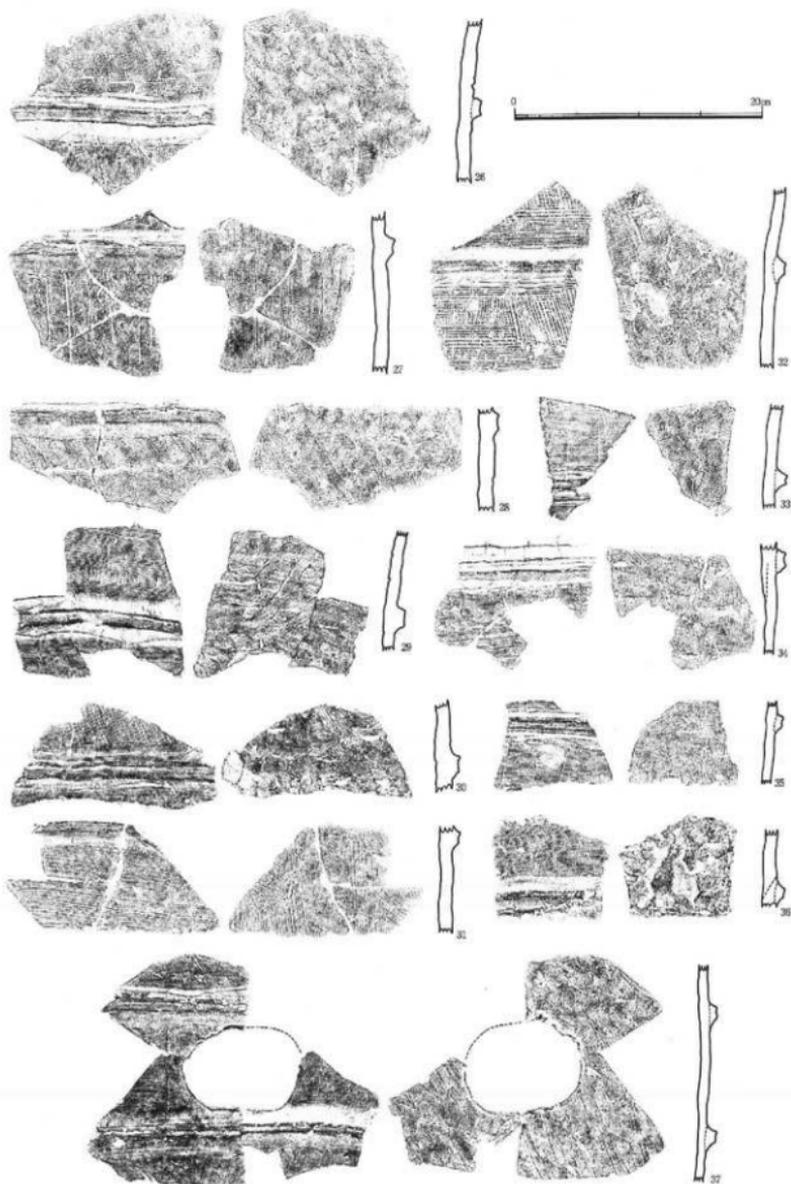
第16図 蓋形埴輪飾り板の類例(1/8)



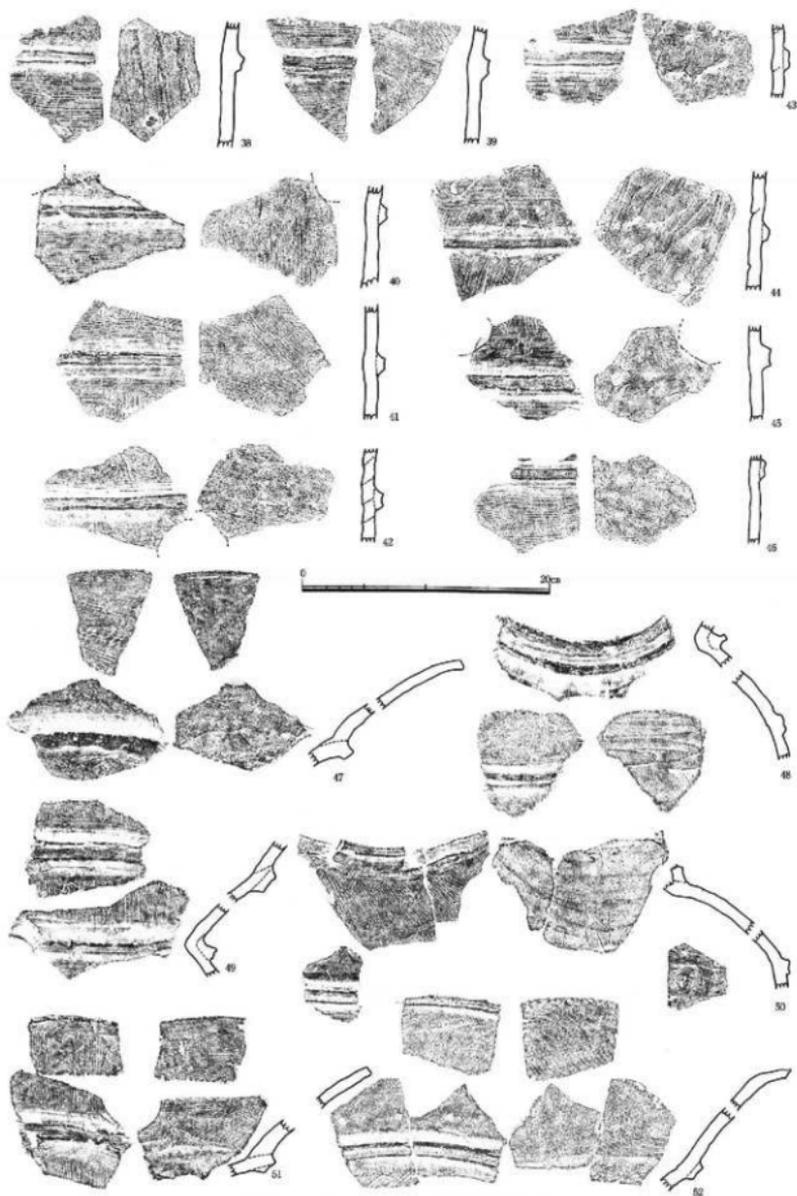
第17图 19-2区 唐福山古墳出土埴輪1(1/4)



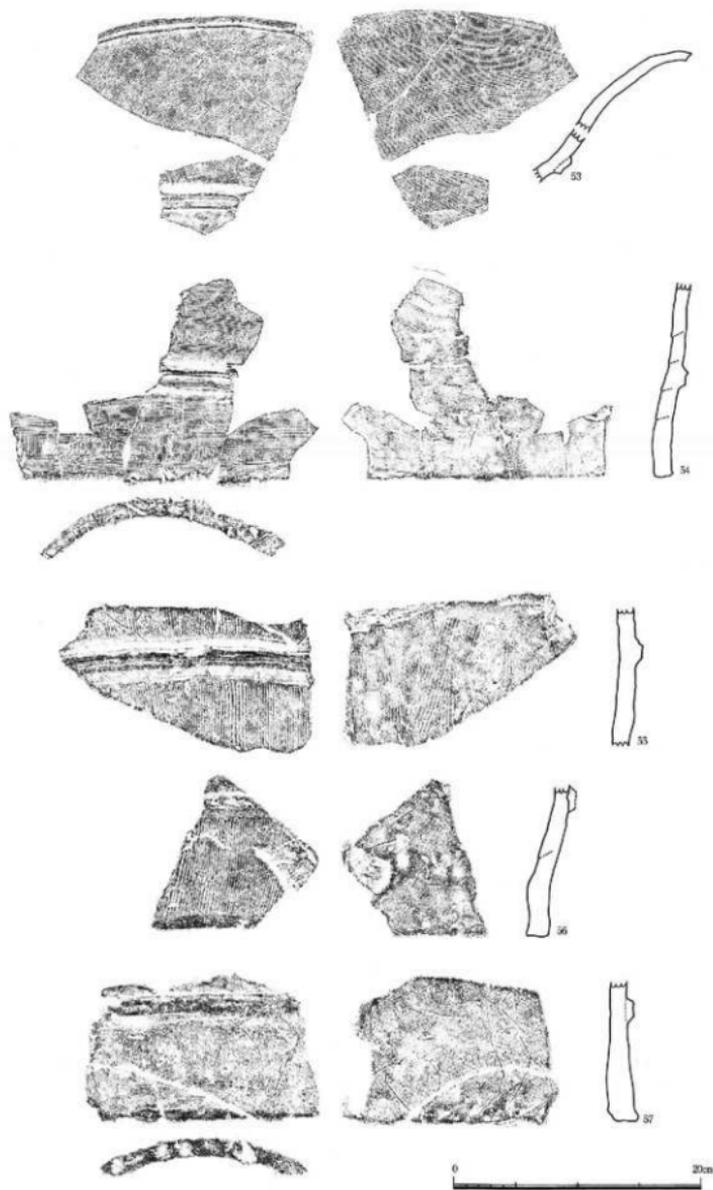
第18図 19-2区 唐櫃山古墳出土埴輪2(1/4)



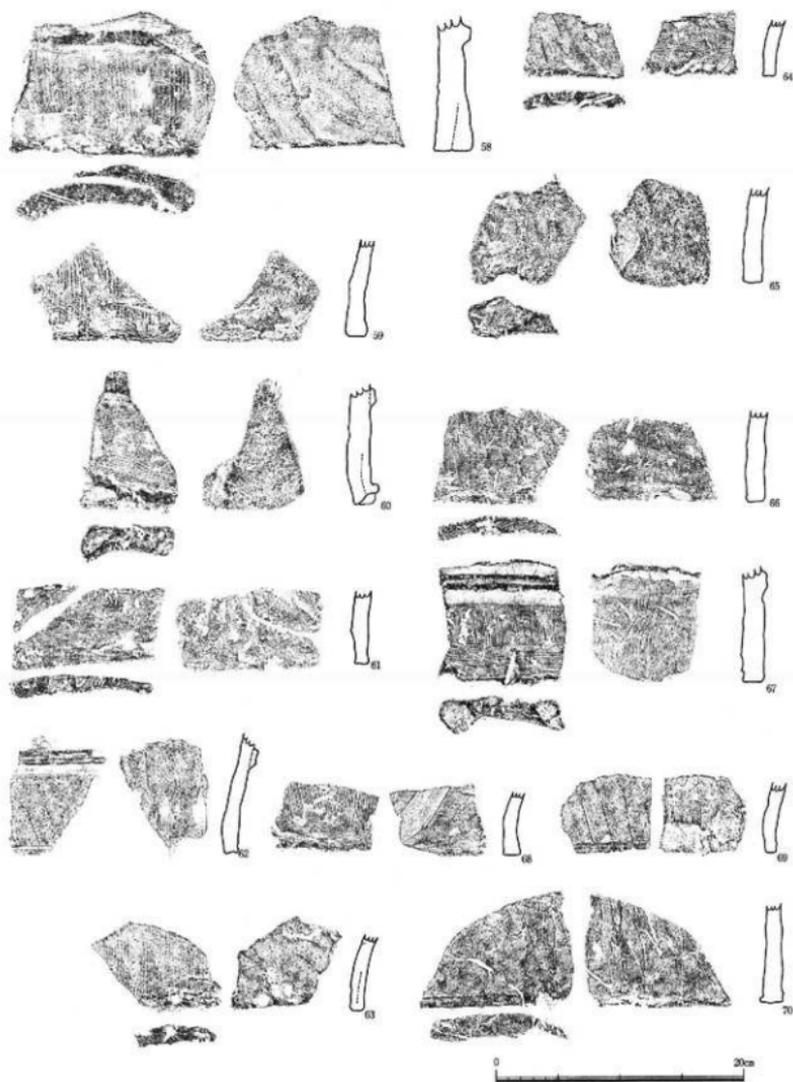
第19图 19-2区 唐檀山古墳出土埴輪3(1/4)



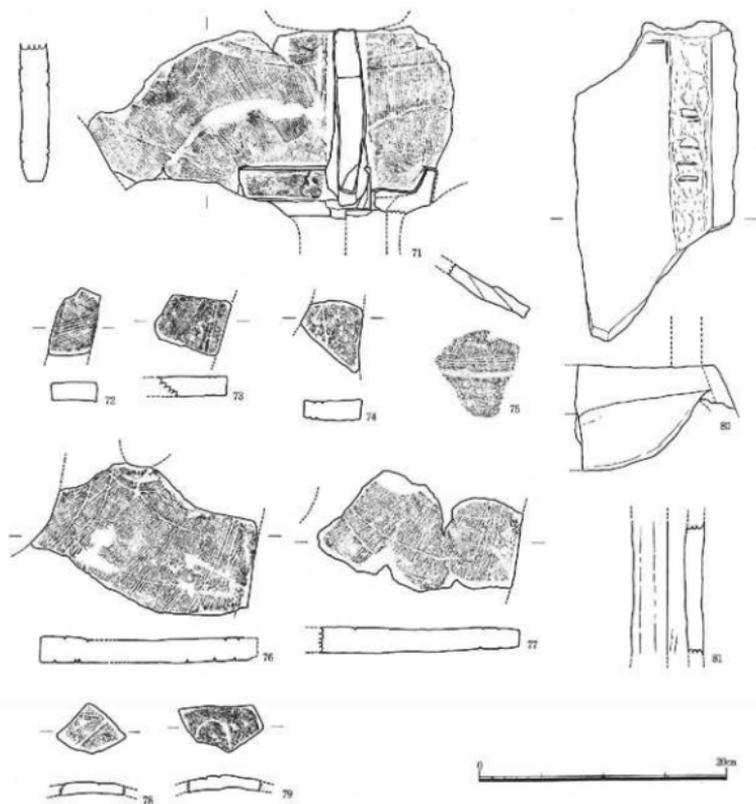
第20图 19-2区 唐檀山古墳出土埴輪4(1/4)



第21图 19-2区 唐檀山古墳出土埴輪5(1/4)



第22図 唐榑山古墳出土埴輪6(1/4)



第23図 19-2区 唐櫃山古墳出土土埴輪7(1/4)

71は、飾り板と口径16cmの受部である。飾り板と受部外面の接合箇所は、粘土を被せて補強する(図版27-71-6)。受部底面は、隙間に粘土塊を置き飾り板の密着と安定をはかる(図版26-71-4)。

飾り板は、土師の里窯跡(HJH89-1区、窯1灰原下層出土)、林遺跡(HY96-8区、SD05出土)、小山遺跡(殿町古墳周濠出土、KM00-2区)に類例がある(第16図)。

林遺跡資料(c)は、8世紀初頭に廃絶した溝からの出土である<sup>69)</sup>。土師の里窯資料(a・b)は、窯1灰原下層から出土した資料だが、もとはB b・B c・B d種ヨコハケ調整の埴輪を焼いていた窯2の資料である<sup>70)</sup>。殿町古墳資料(d)は、周濠から出土し、供献土器の可能性のあるTK23式の須恵器杯蓋・短脚無蓋高坏が伴う<sup>69)</sup>。

類例からみた、この種の蓋形埴輪は、年代の上限が野中古墳に類似する蓋形埴輪や円筒埴輪が多いとされる土師の里窯の窯2、下限がTK 23式併行の殿町古墳となり、ある程度の年代幅を持つ型式であると言えなくもない<sup>39)</sup>。しかし、窯2の埴輪が野中古墳より新しい古墳にも供給されているという指摘があり<sup>40)</sup>、加えて、唐櫃山古墳の円筒埴輪の特徴が、盛土にTK208式須恵器坏蓋片を包含する、市野山古墳内堤の円筒埴輪<sup>41)</sup>に共通することなどから、今回出土した蓋形埴輪の年代は、殿町古墳のTK23式がひとつの目安になる。5世紀後葉である。

### 3 19-3区 (第24・25図、図版8)

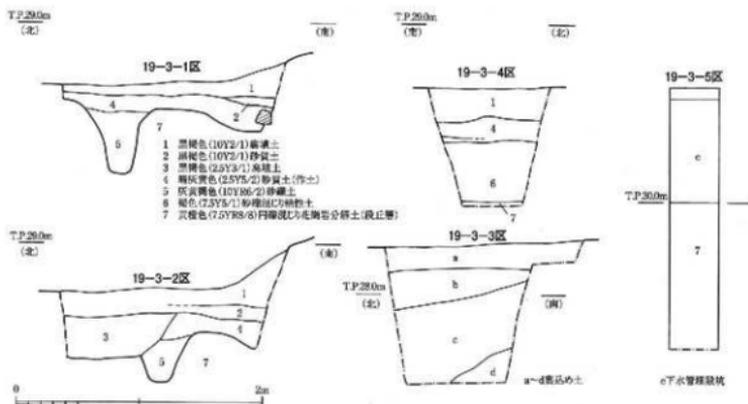
近鉄南大阪線と鍋塚古墳の間に、1×2 m程度の調査トレンチを4箇所(19-3-1~4区)設定した(第24図、図版8)。19-3-5区は、古墳の東、(旧)107号線西歩道で、電柱移設工事の際に、断面観察を実施した地点である。

19-3-1・2区の基本層序は、整地層(1層)、近現代作土層(4層)、段丘層(7層)となり、作土層を切り込む土坑(3層)、作土層にともなう石列、また作土下で円礫を充填する暗渠(5層)を検出した(第25図)。段丘面は耕作の影響を受けているが、19-3-1区で、T.P.28.40mの高さがあった。

一方、墳丘裾から北に約10m離れた19-3-4区は、作土層下に段丘面はなく、埴輪片を含む円礫混じり砂質土(6層)が堆積していた。段丘面が墳丘裾から北



第24図 19-3区 調査区位置図(1/500)



第25図 19-3-1~5区 断面図(1/40)

に向かう途中で、急に落ち込む地形が復元できる。底は T.P.27.60 m を測り、19-3-1 区とは 80cm の比高がある。19-3-3 区は、近鉄南大阪線擁壁の裏込めにあたり、段丘面の落ちを確認することはできなかった。

19-3-5 区は、下水管の下で、段丘層の上面高 (T.P.30.08 m) を確認した。上面高は、下水管理設時に削平を受けた数値であり、もとはこれ以上の高さであったに違いない

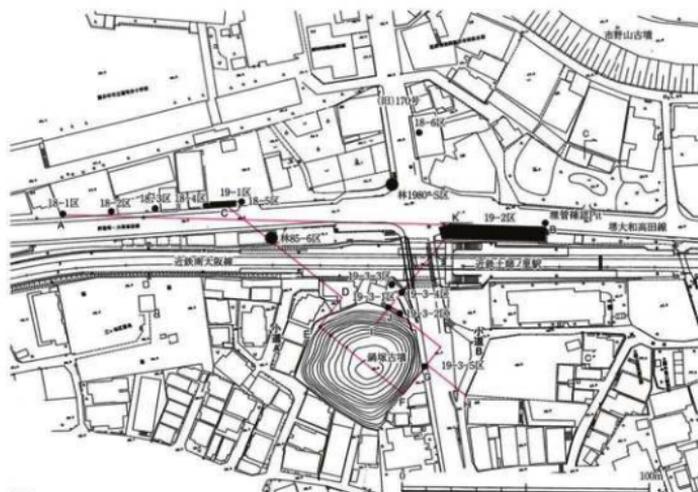
次章でふれるように、これら段丘層の上面高は、鍋塚古墳の平面プランや周辺微地形を復元する貴重な資料になる。

## 第4章 まとめ

### 1 微地形と古墳の立地

府道堺大和高田線に沿う微地形断面図 A-B、高塚山古墳18-5区から鍋塚古墳の東辺にいたる微地形断面 C-H、鍋塚古墳北辺から19-2区にいたる微地形断面 I-K を作成した(第27図)。第27図の黒線は段丘面の起伏、朱線は現地表面を表す。

各微地形断面の測点は、第26図に示すとおり。微地形断面図 A-B は、西から東に並ぶ18-1区・18-2区・18区・3区・19-1区・林85-6区<sup>(12)</sup>・林1980-S区<sup>(13)</sup>・19-2区、微地形断面図 C-H は、高塚山古墳から南東方向に並ぶ19-1区・85-6区・19-3-1区・19-3-2区・19-3-5区、微地形断面図 I-K は、鍋塚古墳から北東方向に林並ぶ19-3-1区・19-3-4区・19-2区である。



第26図 微地形復元にかかわる測点位置図(1/2000)



微地形断面図を作成して、次の諸点が明らかになった。

**微地形断面図A-B** 洪積段丘である国府台地北部の尾根筋を東西に横断する断面図から、高塚山古墳の立地環境を確認した。現地表面は、国道や府道にともなう盛土（交差点下、厚さ3.30m）によって、土師の里交差点付近が一番高く（T.P.31.50m）、西、北、東に向かって傾斜する。しかし盛土を取り除いた段丘面は、高塚山古墳の埴輪列を検出した林85-6区付近が最も高い（T.P.30m）。高塚山古墳が国府台地の分水界の高所に、立地することは間違いない。

高塚山古墳南端の林85-6区と、その北西で墳丘盛土の遺存を確認した19-1区の段丘面の比高は1.74mである。つまり高塚山古墳は、林85-6区付近に走る分水界から北西に下る緩傾斜面に盛土し（微地形断面C-H）、西からの視覚的効果を強く意図していた古墳だと言えそうだ。

高塚山古墳は、藤井寺市教育委員会が実施した、18-3区と18-4区の間地点の調査（TTK06-2）によって、初めて古墳の周壕が検出された。詳細は報告書に委ねるが、古墳の東西で1m以上の比高があり、周壕は墳丘の西側だけに開削されていた可能性がある。

**微地形断面図C-H** これまでに、鍋塚古墳が、北に張り出す尾根筋に築造された古墳であることは知られていた。19-3-5区の断面観察で、基盤層たる段丘面の高さは、T.P.30.08m以上であった。

一方、鍋塚古墳の北辺に設定した19-3-1区の段丘面はT.P.28.40mであり、19-3-5区とは約1.7mの比高がある。19-3-1区・19-3-2区付近は、後世に削平を受けて低くなったのではなく、近鉄南大阪線を挟んで北に位置する19-2区の段丘面がT.P.28.20mなので、ほぼ旧状を残していると考えてよい（微地形断面図I-K）。

鍋塚古墳についても、19-3-5区付近が高所となる尾根筋の西斜面に盛土した古墳であったと言えそうだ。微地形断面図C-Hによれば、鍋塚古墳と高塚山古墳の間は、北東から小規模な谷が入り込む。鍋塚古墳は、高塚山古墳が築造された尾根筋から、仲津山古墳後円部付近で北東に派生する小規模な尾根筋に築かれていたのである。

**微地形断面図I-K** 鍋塚古墳北辺の形状が類推できた。墳丘から北に約10m離れた19-3-3区から、埴輪片を含む円礫混じりの砂質土の堆積（6層）を検出したことは先に述べた。この落ち込みは、堆積土が唐櫃山古墳の周壕を埋めた土に類似し、唐櫃山古墳の周壕のように、近世の再開発によって埋められたのではないかと考えている。

地籍図をみると、古墳の北部は、西の字「鍋塚北」から東の字「道ノ南」にいたる逆U形の区画がめぐる（第29図）。この区画と字「道ノ南」の間を通る小道は、現在的小道Bであり、この区画と字「鍋塚北」の字界は、小道A付近になろう（第26図、図版8）。なお、字「鍋塚」の輪郭は、史跡指定の範囲と一致する。

このような区画は、その形状から周壕跡ではないかと推定することも可能であった。しかし、今回調査した19-3-1～3区から段丘面が検出されたので、この可能性は完全に消えた。

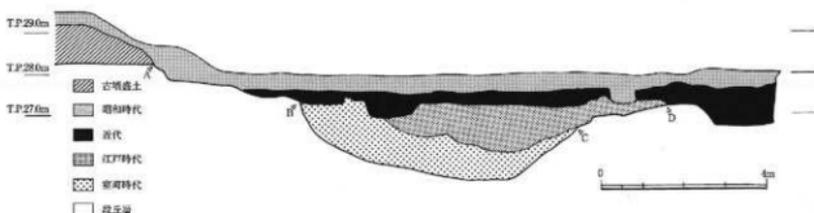
地籍図が伝える古墳北半をめぐる区画は、古墳に関連する施設だとすれば、墳丘の一部をなす

テラス状の平坦面になる。鍋塚古墳は、仲津山古墳の外堤に接して、北東に張り出す方墳である。テラスは、すでに完成していた仲津山古墳の外堤を除いた西、北、東の三面に造成された推定することができる。現状の鍋塚古墳は、段築のない一辺約50mの方墳だが、以上のような復元が妥当であるとすれば、もとは西、北、東の三面に、最大で幅約10mのテラスをもつ、一部2段築成の方墳であった可能性がある。類推を重ねるが、19-3-3区で検出した段丘面を切る込む落ち込みは、テラスの外に開削された壕になるのかも知れない。今後の周辺調査に期待したい。

## 2 唐櫃山古墳周壕と近世の開発

唐櫃山古墳の周壕は、16・17世紀に埋め立てが進み、平坦になった。第28図は、2001年調査の報告書に掲載された周壕の断面図を、記述にしがって、年代別に大別・整理したものである。

大別層序は、上層から昭和、近代、江戸時代、室町時代、地山の段丘層となり、室町時代から



第28図 2001年調査唐櫃山古墳後円部周壕断面図(1/120)



第29図 地籍図にみる鍋塚古墳・唐櫃山古墳



第30図 延宝5(1677)年の沢田村の土地利用

江戸時代にかけて埋没が進行していたことが見て取れる。今回の調査によっても、14世紀から16・17世紀の遺物が出土した。

2001年の調査は、埋め立て後の土地利用について言及していない。今回の調査は、埋没後の平坦面から暗渠を検出したので、埋土の上層については、水掛りの悪い国府台地北部の高所にあつて、しかも作土層付近にすき床層が形成されていなかったことなどから、畑地であると断定した。周壕跡の平坦化は、周壕跡地の再開発が目的であつたに違いない。

**近世の沢田村絵図** 唐櫃山古墳の周壕跡地における考古学調査の成果は、江戸時代の沢田村の土地利用状況に一致する(第30図)。「からひつ塚」の西の区画に新開畑を表す「●」印がある。第30図は延宝5(1677)年に作成された沢田村絵図(「松村家文書」)をもとに、土地所有状況とその利用形態がまとめられたものである<sup>10)</sup>。絵図の年代と、唐櫃山古墳の周壕跡が再開発された年代は、ほぼ一致する。新開畑とあるので、再開発の年代は江戸時代前期をさかのぼるものでなく、周壕埋土の遺物が示す16・17世紀という年代観と矛盾するものではない。

このような唐櫃山古墳の事例は、近世に行われた古墳周壕跡地の再開発のモデルになる。

### 3 唐櫃山古墳と市野山古墳

**唐櫃山古墳の規模** 2001年の調査に続いて、唐櫃山古墳の後円部に周壕が存在することを確認した。周壕は19-2区の検出状況からみて、前方部へ盾型に伸びる。

19-2区は、幅7.30m、深さ1.30m、壕底の標高が26.70mである。2001年の調査は、現況で幅約9m、墳丘肩からの深さ約2m、周壕の外側の肩から深さ約1.5m、と報告する。壕底の標高は、報告書掲載の第7図「唐櫃山古墳平面図及び墳丘断面図」から測ると、最深部で25.40mであつた。

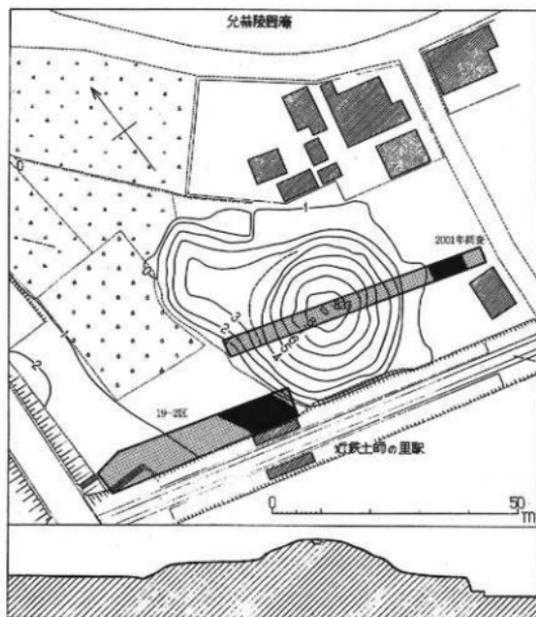
2001年の調査結果と比較して、壕底の標高は大差ないものの、壕幅には2mほどの開きがある。2001年調査の報告書第7図から計測すると、幅9mとは図中のB-D間の距離である。しかしB点と、周壕外側の肩が急に落ちるC点間の距離は約7.10mとなり、今回の測量値に近似する。

このような調査結果からみて、唐櫃山古墳後円部の周壕は、現状で幅7.10~7.30mとなろう。壕は、東側より今回調査した南西側の方が深い。

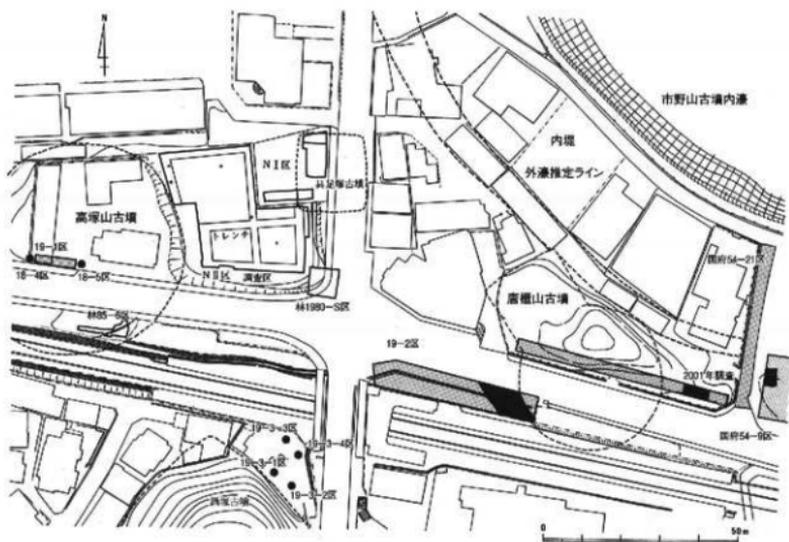
第31図の原図は、昭和30(1955)年に、北野耕平氏が府道敷設工事に先立つ調査で作成した墳丘測量図である<sup>11)</sup>。周辺環境の変化が著しい現在にあつて、貴重な測量図であり、全長は約53m、後円部直径は38mと報告されている。第31図はこの図に、近鉄土師ノ里駅に残る後円部断面の位置や市野山古墳周壕から距離を測り、2001年の調査区と19-2区を加えたものである。

2回にわたる周壕部の調査によって、埋没していた後円部裾周りの形状が明らかになり、後円部直径は45mになった。墳丘測量図の、ちょうど1m等高線が後円部の本来の輪郭を表していたのである。全長は、前方部正面の墳丘側の0m等高線までを測り、約57mとなる。

**唐櫃山古墳の埴輪** 19-2区の周壕から出土した埴輪は、出土状況から、墳丘に樹立していた埴輪であつたと考えた。突帯間外面の2次調整は、Bd種ヨコハケが少なく、静止痕の傾きが向かつて約10~20度を測るBc種ヨコハケが主体であり、底部資料を含め、市野山古墳の内堤から



第31図 唐櫃山古墳の周境(1/100)



第32図 唐櫃山古墳と市野山古墳の位置関係

出土した埴輪（A調査区出土埴輪）に共通する特徴を有する。2001年の調査は、出土した埴輪を、墳丘西側斜面出土、墳丘盛土内出土、周壕内出土の3群に分け、なかでも墳丘西側斜面出土の一群が、古墳樹立埴輪の基本資料になるとした。

墳丘西側斜面出土資料は、静止痕のかなり傾く破片やC種ヨコハケが含まれ、19-2区周壕出土資料より新しい傾向を持つ埴輪片である。しかし、考古学的な年代単位のなかで、これら調整技法の違いは、必ずしも確たる前後関係を表すものでなく、唐櫃山古墳と市野山古墳の内堤は、ほぼ同時期の所産であると判断しておく。

**唐櫃山古墳と市野山古墳の外壕** 市野山古墳外壕は、一瀬和夫氏が提唱した外周溝にあたる。本報告では外壕とする<sup>(16)</sup>。また貯水の痕跡がないので、「壕」と表記した。

これまでの調査によって、市野山古墳が二重壕の大型前方後円墳であることは確実である。外壕について、古墳の西側では（国府遺跡80-2区、同80-3区）、(II)170号線西側歩道付近に外側の肩部を求め、幅18~20mと推定されている<sup>(17)</sup>。東側でも（KO91-5区）、外壕の肩が確認されている<sup>(18)</sup>。現在、外壕は第2図のように全周する復元案もあるが、全容を解明するには、さらなる調査と検討が必要である

第32図は、市野山古墳の外壕が唐櫃山古墳付近を通過するとして推定復元図<sup>(19)</sup>に、今回の調査成果を加筆したものである。外壕の幅は唐櫃山古墳の北で約8m、後円部付近で約5mである。唐櫃山古墳の北辺を通過するとして根拠は、地割りのほか、唐櫃山古墳東の国府遺跡54-9区から、幅4m弱、深さ90cmの溝と推定される落ち込みが検出されたことにある<sup>(20)</sup>。ただし、落ち込みの年代や、これが東西に伸びる確証はない。西隣の国府54-1区では、「特に中央トレンチは外濠にあたる想定したところであり、ここで外濠が検出されなかったことは特記すべきであろう」とも報告されている<sup>(21)</sup>。

これとは別に第31・32図から容易に知られるように、唐櫃山古墳の後円部直径が約45mに拡大すると判明したことも、市野山古墳の外壕が唐櫃山古墳の北東側に開削されていたという想定に再考を促すことになった。

現在、二つの古墳の位置関係を明らかにし得る資料はない。埴輪の特徴が共通することから、市野山古墳の内堤・外壕の整備と唐櫃山古墳の築造はほぼ同時期であったという前提に立つならば、①市野山古墳の外壕開削が優先され、唐櫃山古墳の平面プランは不完全な形になった、②唐櫃山古墳の平面プランが優先され市野山古墳の二重壕プランは変更された、あるいは、③この付近には、もとより外濠を開削する計画はなく、そのスペースに唐櫃山古墳が築造された、等々のケースを想定することができる。今後の調査の進展に期待したい。

## 挿 図 出 典

- 第 2 図 藤井寺市教育委員会『新版 古市古墳群』1993年、94頁、第77図を転載。
- 第16図 土師の里窯跡（HJH89-1区）は、藤井寺市教育委員会「土師の里窯跡群」『石川流域遺跡群発掘調査報告VI』1991年、212頁、第169図から転載。林遺跡（HY96-8区）は、藤井寺市教育委員会「林遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告XII』1998年、116頁、図117から転載、一部改変。小山遺跡（殿町古墳・KM00-2区）は、藤井寺市教育委員会「小山遺跡・津堂城山古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告XVII』2003年、19頁、図12から転載。
- 第28図 大阪府教育委員会「唐櫃山古墳」2001年、9～10頁、第7図をもとに作成。
- 第29図 藤井寺市市史編纂委員会「藤井寺市史 第10巻 史料編 8上」1991年、508～509頁、分割図8を転載、一部改変。
- 第30図 柴田知憲「第4章 沢田村」『藤井寺市史 第2巻 通史編2』2002年、392頁、図8を転載、一部改変。
- 第31図 北野耕平「河内野中古墳の研究」1976年、10頁、第7図を転載、一部加筆。
- 第32図 大阪府教育委員会「石川左岸幹線管渠築造遺跡群発掘調査概要・I 林遺跡 西人井遺跡」1986年、4頁、fig.2を転載、一部改変。

## 注

- 1 大阪府教育委員会「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報」11、2007年。
- 2 調査を担当した藤井寺市教育委員会上田聰氏に教示を得た。記して感謝申し上げる。
- 3 北野耕平「唐櫃山古墳の調査」『大阪府の文化財』1962年。北野耕平「唐櫃山古墳とその墓制をめぐる諸問題」『藤澤一夫先生生誕記念論文集』2002年。
- 4 大阪府教育委員会「唐櫃山古墳」大阪府埋蔵文化財調査報告2000-9、2001年。
- 5 周埴内出上の陶磁器の名称・年代、ならびに近世の開発について、森村健一氏（堺市教育委員会）から教示を得た。記して感謝申し上げる。
- 6 藤井寺市教育委員会「林遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告XII』1998年。
- 7 藤井寺市教育委員会「土師の里窯跡群」『石川流域遺跡群発掘調査報告VI』1991年。
- 8 藤井寺市教育委員会「小山遺跡・津堂城山古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告XVII』2003年。
- 9 小栗明彦「蓋形埴輪年輪」『埴輪考1』大阪大谷大学博物館、2007年。小栗氏の分類によると、唐櫃山古墳の立ち飾りは、立ち飾り部Ⅱe型式になる。年代は須恵器TK216式とする。
- 10 藤井寺市教育委員会「土師の里窯跡群」『石川流域遺跡群発掘調査報告VI』1991年、225頁。
- 11 大阪府教育委員会「允恭陵古墳外堤の調査—国府遺跡80-3区—」1981年。允恭陵は二重壕なので、外堤を内堤と表記した。
- 12 大阪府教育委員会「昭和60年度 国府遺跡発掘調査概要—国府台地北半上遺跡群の調査—」1986年。
- 13 大阪府教育委員会「昭和60年度 国府遺跡発掘調査概要—国府台地北半上遺跡群の調査—」1986年。
- 14 柴田知憲「第4章 沢田村」『藤井寺市史 第2巻 通史編2』2002年。
- 15 北野耕平「河内野中古墳の研究」1976年。
- 16 大阪府教育委員会「允恭陵古墳外周溝・長持山古墳の調査—国府遺跡80-2区—」1980年、21頁。一瀬和夫氏は「5.まとめ」のなかで、「周濠本来の機能が「水をたたえる」ということであれば、外堤周囲に周溝は溝底落差によって、

その機能を果たし得ない。したがって、周溝という概念が適当であると思われ、允恭陵古墳の場合、「外周溝」と呼称することにした」と述べた。

仲津山古墳、市野山古墳（允恭陵古墳）の「ほり」は、貯水のない空壕である。水が溜まらない、あるいは溜めることができない理由は、基盤層が土壌保水力の弱い（透水性の高い）段丘礫層であること、周壕が広面積なので、天水は溜まっても水深が浅く蒸発すること、国府台地の高所にあつて引水することが困難な地形環境にあることである。

一般的に、水をたたえる周溝は、水路を引き水を溜めた結果である。したがって、水を引くことが困難である仲津山古墳、市野山古墳は、当初から空壕であつたと推断する。周壕本来の機能は、必ずしも「水をたたえる」ことではない。調査によれば、「外周溝」と呼ぶ溝は、幅が20m近くあるという。このような「外周溝」は、古墳の外郭施設としては、「溝」ではなく、やはり「壕」が適切である。

- 17 大阪府教育委員会「允恭陵古墳外周溝・長持山古墳の調査—国府遺跡80-2区—」1980年。
- 18 藤井寺市教育委員会「KO91-5区」『石川流域遺跡群発掘調査報告XII』1997年。
- 19 大阪府教育委員会「石川左岸幹線管渠築造遺跡群発掘調査概要・1 林遺跡 西大井遺跡」1986年。
- 20 大阪府教育委員会「国府遺跡発掘調査概要・X 一藤井寺市国府・惣社・北条・大井所在—」1980年。
- 21 大阪府教育委員会「国府遺跡発掘調査概要・X 一藤井寺市国府・惣社・北条・大井所在—」1980年、22頁。

# 図 版





2 18-2区墓01 (北から)



1 18-1区 (南から)



3 18-2区墓01遺物出土状況 (北から)



4 19-1区・高塚山古墳基底部 (東から)



5 19-1区・高塚山古墳基底部盛土 (南から)



6 18-6区 (南から)

1 土師ノ里駅と高塚山古墳後円部  
(南東から)



2 店舗基礎撤去作業  
(西から)



3 堺大和高田線敷設時の盛土  
(西から)



1 道路盛土・店舗基礎撤去面  
(西から)



2 店舗基礎跡と古墳の周壕  
(南西から)



3 近世の墓石  
(西から)



1 唐櫃山古墳検出状況  
(西から)



2 唐櫃山古墳後円部  
(南西から)



3 唐櫃山古墳後円部  
(西から)



1 近世の墓石と溝01  
(南から)



2 北壁周壕断面  
(南から)



3 周壕断面と溝01  
(南東から)



1 堤状に削り残した地山  
(南西から)



2 堤状に削り残した地山  
(南西から)



3 堤状に削り残した地山  
(北西から)



1 19-2区西半部 (東から)



2 方形微高地01 (東から)



3 溝02 (南西から)





1 鍋塚古墳と19-3-1・2区 (北東から)



2 鍋塚古墳と19-3-1・2区 (北西から)



3 19-3-1区 (北東から)



4 19-3-2区 (北東から)



5 19-3-3区 (南西から)



6 19-3-4区 (西から)



7 鍋塚古墳西の小道A (南西から)



8 鍋塚古墳東の小道B (北東から)



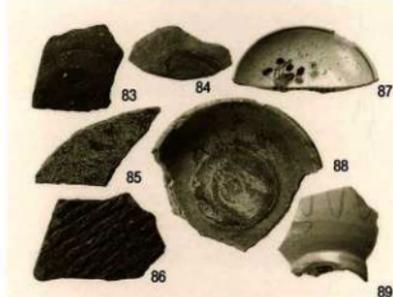
1



2



82



83 84 85 86 87 88 89



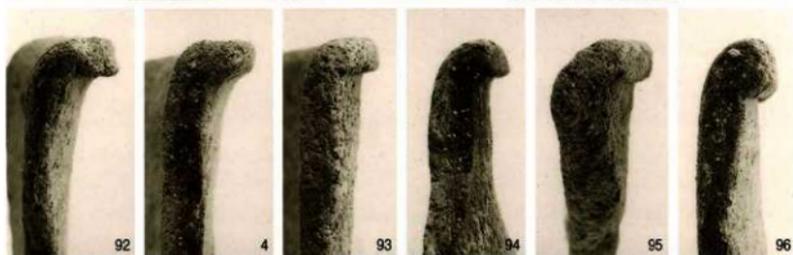
90a

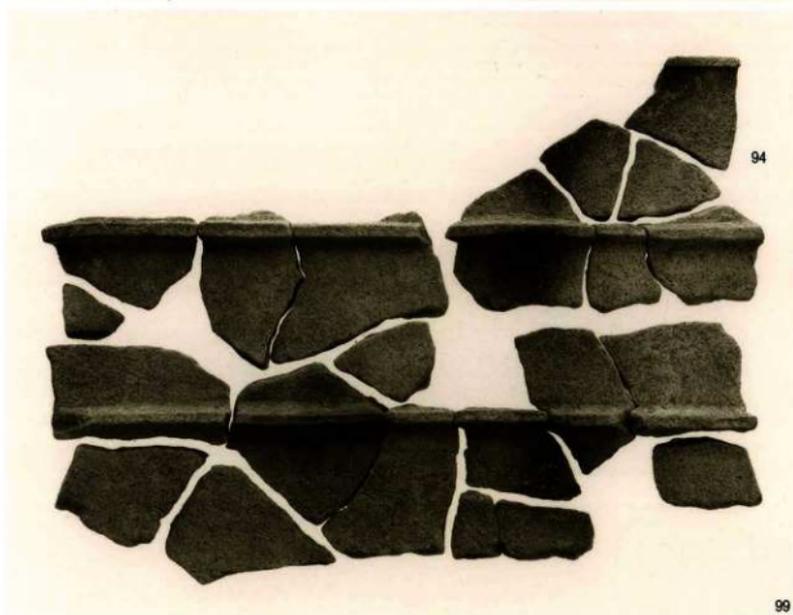
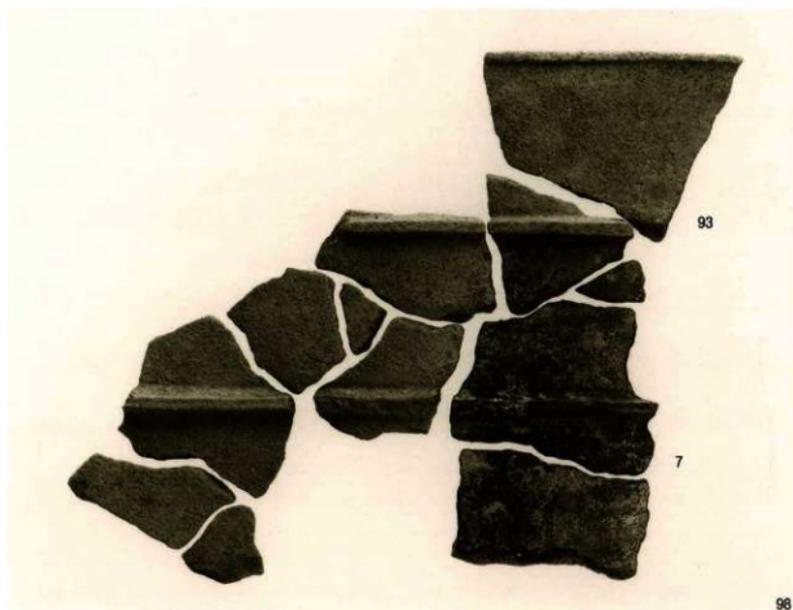


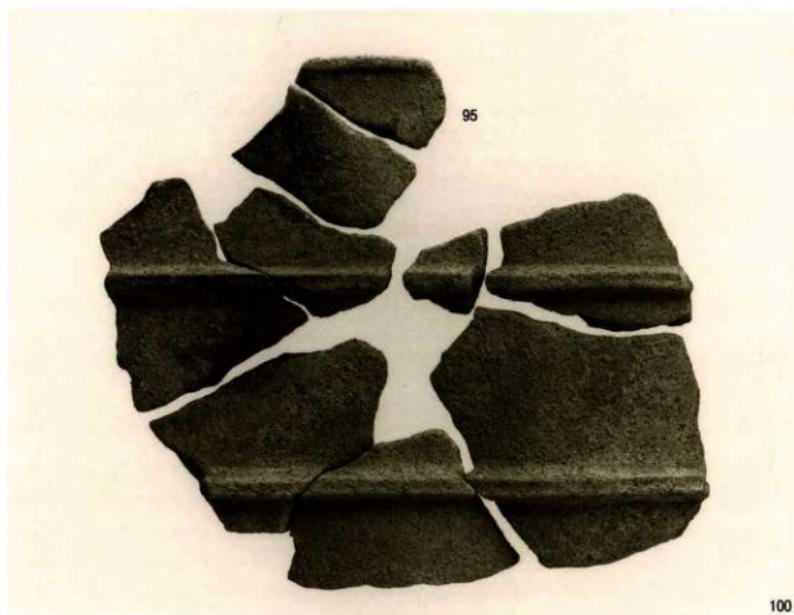
90b



91



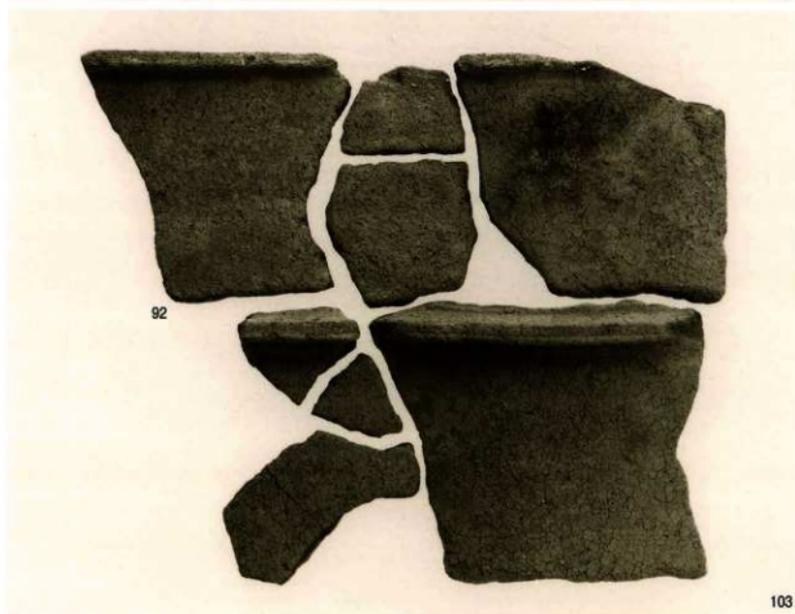
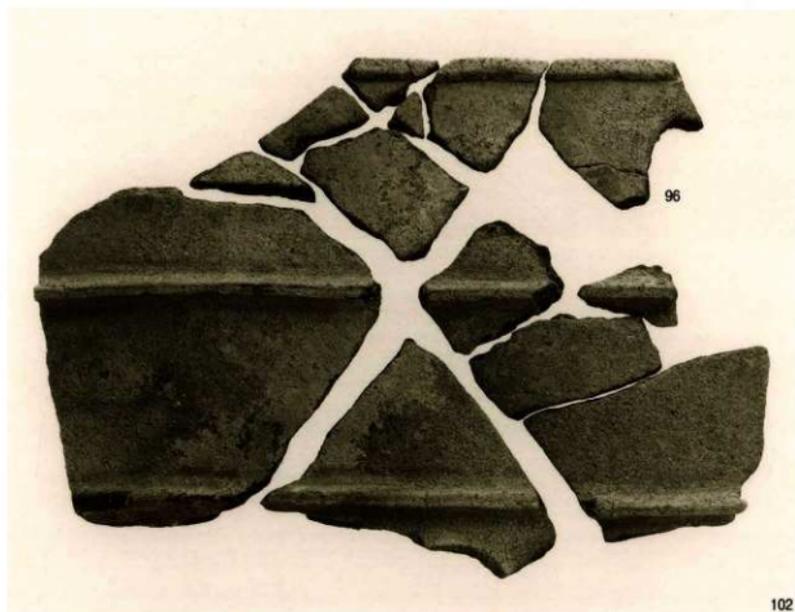




100



101





9a



9b



25a



25b



18



15



14



20



19



13



17



16



24a



24b



22a



22b



23a



23b



12a



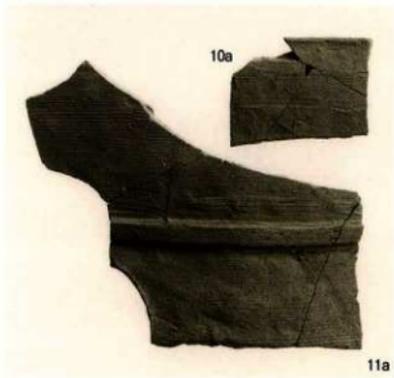
12b



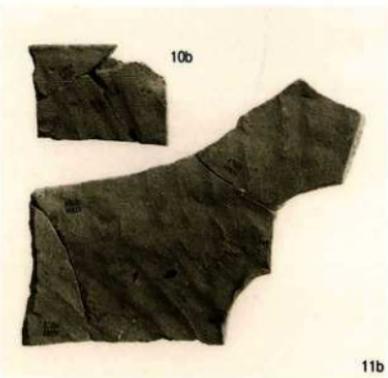
21a



21b



11a



11b



26a



26b



27a



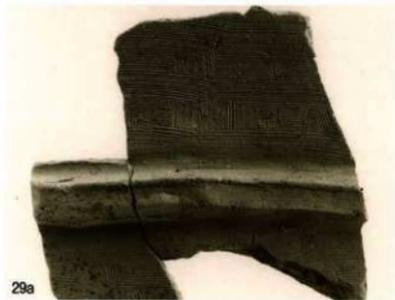
27b



28a



28b



29a



29b



37a



37b



32a



32b



30a

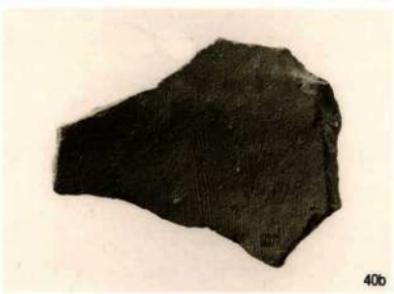
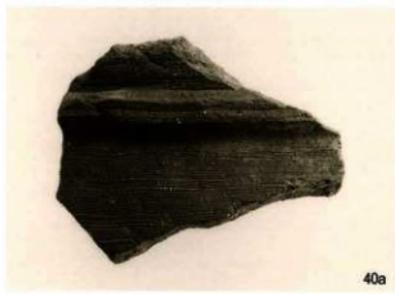


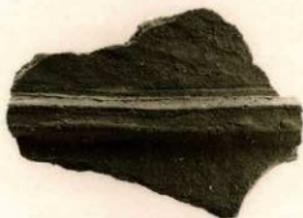
31a



31b







42a



42b



44a



44b



43a



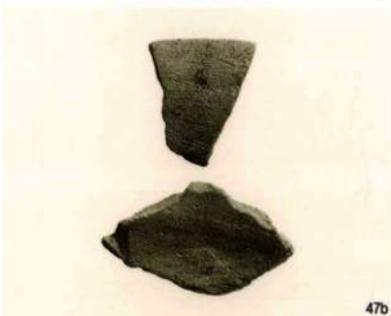
43b



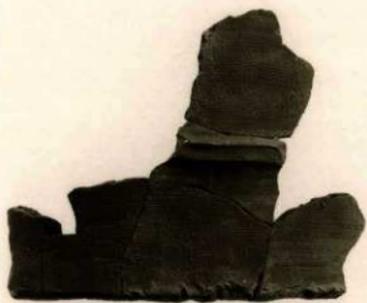
45a



45b







54a



54b



55a



55b



56a



56b



58



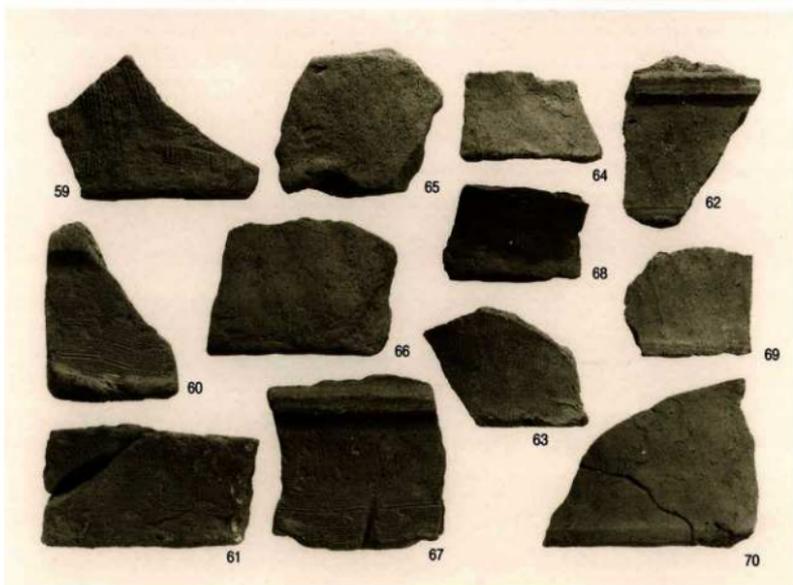
67



66



70





71-1



71-2



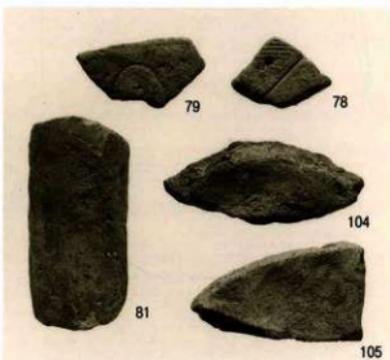
71-3



71-4



71-5



報告書抄録									
ふりがな	はやしいせき・こういせき・はじのさといせき								
省名	林遺跡・国府遺跡・土師の里遺跡－ 一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事に伴う発掘調査－								
副省名									
巻次数									
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	2008-4								
編集者名	小山山宏一								
編集機関	大阪府教育委員会								
所在地	(〒) 540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)								
発行年月日	2009年3月31日								
ふりがな	ふりがな	コード							
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
林遺跡	大阪府藤井寺市沢田3丁目	27226	55	34度 34分 8秒	135度 37分 2秒	2006年6月13日 ～ 2007年3月30日	20㎡	一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事	
国府遺跡	大阪府藤井寺市国府1丁目	27226	3	34度 34分 7秒	135度 37分 6秒	2007年4月10日 ～ 2008年3月13日	303㎡	一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事	
土師の里遺跡	大阪府藤井寺市沢田4丁目	27226	20	34度 34分 6秒	135度 37分 3秒	2007年2月8日	7㎡	一般国道（旧）170号及び主要地方道堺大和高田線交差点改良工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
林遺跡	朱落跡	古墳時代	埋葬施設	須志器		高塚山古墳の基底部盛土を確認した。 7世紀の埴輪片数きの埋葬施設を検出した。			
国府遺跡	朱落跡 墓	古墳時代	唐櫃山古墳の 墳丘と周濠	埴輪		唐櫃山古墳の後円部と周濠を確認した。			
土師の里遺跡	集落跡					鍋塚古墳北辺の旧地形を確認した。			
要約	林遺跡では、主要地方道堺大和高田線下、高塚山古墳の基底部が遺存していたことを確認した。 国府遺跡では、主要地方道堺大和高田線下で、唐櫃山古墳の後円部墳丘裾と周濠を確認した。 土師の里遺跡では、鍋塚古墳の北辺に、テラス状の平坦面を確認した。								

大阪府埋蔵文化財調査報告 2008-4

林遺跡・国府遺跡・土師の里遺跡

--- 一般国道（旧）170号及び主要地方道堺人和高田線交差点改良工事に伴う発掘調査 ---

発行 大阪府教育委員会

〒 540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06 (6941) 0351

発行日 平成 21 年 3 月 31 日

印刷 (株) 近畿印刷センター

